

魔法科高校の妖精遣い
だよ……え？ そんなに
チートかな？

風早 海月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古式魔法の中でも、とりわけ有力と呼ばれる家系がある。

御巫家。みかなぎ妖精魔法とよばれる、妖精を使役して魔法を使う家系。

幼い頃から妖精に好かれていた一人娘、御巫栞みかなぎしおりが第一高校に入学する。

強すぎる力が1つの場所に揃つた時、力は争いを呼ぶのか、はたまた友情を産むのか。
それは誰にも分からぬ。

注意

・達也と女オリ主の絡みがたまにあります。ネタです。この2人が恋愛することは

ありません。筆者は百合好きなので。

更新状況

・話が詰まつて、不定期更新中。他作品へ逃げの一手。少々お待ちください。

目

次

九校戦メンバー選出

九校戦練習

プロローグ編

入学試験

入学編

入学式

一科生の能力ってそんなに高い?

11

懇親会と九島

シスコン達也、小さい女の子なら誰で

もいいの?

栢がとにかく屋台を楽しむ話

妨害の触先

新人戦開始。

新人戦2日目

バトル・ボード 準決勝

零と栢の:

ホントにホントだよ

59

少女の叫び

52

新入部員勧誘週間

44

お使い、よろしくね!

35

九校戦編

26

いざこざ

19

94 87 80 71

148 141 134 127 119 112 104

九校戦編

プロローグ編

入学試験

精靈魔法。

現代魔法的に記すと、情報次元（イデア）上に存在する独立情報体である精靈を介して事象を改変する魔法と言える。

精靈魔法の名門、吉田家での神靈の喚起を行う星降ろしの儀に使われる神靈も、精靈の1つと言える。

それと似たような魔法に妖精魔法と呼ばれるものがある。

物理次元に存在する靈子ブシオシ^{物理的要素}と想子サイオソと原子アソシで出来ている、妖の一種だ。

物理的因素を持つていてる妖は、物理的に殺される。だからこそ、中世から近代にかけて妖というものが駆逐されていった。

しかし、残るところには残っているのだ。

妖の中でも、強力な力を持ち、契約者に契約された妖は妖精と呼称される存在となる。

妖精となつた妖は姿形を大きく変える。その姿は契約する人の流派にもよるが、大抵

はおとぎ話に出てくる妖精のイメージがあり、手のひらサイズの少女（稀に幼女）となる。

そんな妖精を使役して魔法を使う人々のことを、その業界の人々はこう呼ぶ――

――「妖精遣い」と。

☆☆☆☆☆

2092年8月にあつた佐渡島襲撃事件にはひとつだけ裏が存在した。

その場にいた一条家さえも黙らせる程の威力を誇る戦略級魔法で援軍に来た新ソ連軍（関与は否定）を消し去つた1人の少女。

御巫
衆。

妖精を現代まで受け継ぐ御巫家の一人娘だ。

古式の十師族とさえ言われる程、古くからある魔法使いの家系で、天皇の魔術的指南役まで務めていたこともあつたらしい。

そんな彼女は2092年9月末に国防海軍の非公認戦略級魔法師として登録されて

いた。

「…？」

「もう一度言おうか？俺はもう長くない。今や御巫を継げるのはお前だけだ。分家の者達は私の妖精——ハルへの繼承権がない上に、ついこの間も大切な妖精を1人失つてしまつてゐる。彼らには残念だが、任せられない。ハルを継いだものがこの屋敷の全ての権限を掌握できる。俺が死ぬ前にお前に預けたい。」

日本人としては珍しい銀髪に透き通るほど白い肌そして水色っぽい瞳の少女と、床に伏せるまだ老人と言うには早すぎる男が話していた。

「お父様…」

「我らには日本を守るという使命がある。1000年以上前から受け継ぐこの使命を果たせ、栢。」

官職こそ貰わなかつた御巫家だが、常に国を守るために正1位と同等の棒給を支払われていたといふ。

「今でも我らは特權階級にあることを忘れるな。海外の考えだが、ノブリス・オブリー・ジユだ。権利には義務が付きまとう。それを忘れずに努力すれば、人はついてくる。

……御巫を頼む……」

「お父様……わかりました。…………ハル、おいで。」

栢の手のひらに若草色のドレスを纏う妖精がちよこんと立つ。

「只今をもつて、わたくし、御巫栢は……貴女と契約致します。」

「よろしくね、栢。」

2095年1月1日。

御巫家に若き当主が誕生した。

☆☆☆☆☆

『そこまで。回答をやめて、手をキーボードから離してください。訂正が必要な場合は
挙手をしてください。試験官立会の元、訂正を許可します。』
(ふう……引き継ぎも大変だつたけど、テストはどうにかなつた……)

「もっと私を頼ればいいのよ！」

国立魔法大学附属第一高校の入学試験。

栄は筆記テスト（試験用のコンピュータでのC B Tだが）は当主の引き継ぎで満足に勉強出来ていなかつたことと：彼女のせいで集中出来なかつたのだ。

〔雷電、やめてちよだいって言つておいたんだけど？〕

〔だつて、私が教えればいいじやない！〕

〔それじやあ試験の意味が無いでしょ。〕

〔えー？ そんなことないわ！ 私は貴女のものだもの！〕

〔その言い方は犯罪臭するからやめて。〕

〔雷電はその名の通り、電気に関する妖精だ。世話焼きなのは可愛いのだが：〕

〔だいたいなんで私の胸元に入つてきてまで着いてくるの。〕

〔心配でしようがなかつたのよ？ 最近ちつとも休めてないもの！〕

試験のサーバーがクローズして、試験が終わる。

『受験番号952001番から952050番までの人は13：30～移動をしますので、それまでに昼食を済ませておいてください。それ以降の人はそれぞれ受験時間の1時間前にはここに着席して待機しててください。それでは一旦解散とします。』

栄は机に突つ伏す。

〔ちよ、潰れる！〕

「…ごめんなさいね、胸小さくて。」

一度起き上がりつてそれだけ念じると、また突つ伏した。

「く、苦しい…………」

☆☆☆☆☆

第一高校の実技試験は、処理速度、干渉力、キヤパシティの3点という、魔法師ライセンスの評価方法と同じである。

まずはキヤパシティ。

キヤパシティは魔法式の規模の大きさを指す。

『はい、次の人ー。』

『はい。952740番、御巫栄です。』

『はい、じゃあこの目標物を移動・加速複合魔法で行つたり来たりさせて。そのCADの番号＝工程数になつてるから、4の倍数ずつ、ね。』

『はい。』

『じゃあ4。』

難なく動く。

『8。』

……

『68!』

……

『80!』

周囲の受験生は驚いているが、栢からしたらこんな単純作業なら100工程くらい超えることは楽勝だ。古式魔法師に必要なのは、速度よりもキャパシティだ。

自分の頭の中に魔法陣を描いて魔法を行使するような古式魔法師ならさらに多いだろう。

続いて受けるのは干渉力だ。

干渉力はエイドスを書き換える力の大きさだ。

試験方法は放出系単一魔法での電気回路送電。

要は検流計に抵抗を付けた電源のない回路に電流を流して、その大きさで測るという
もので、世界的に基準が決められているが、それは割愛する。

栢の場合は、干渉力自体は強いが、戦略級魔法師としては最弱だろう。
高い水準点と言つたぐらいの点数でスルーする。

最後の速度。現代の魔法においてある意味重要なパラメータである。そして、魔法師
の優劣をつける上でとても重要なものだ。

『次の人、どうぞ。』

「952740番、御巫栢です。」

『どうぞ。』

備え付けのC A Dにサイオンを流し込む。

起動式を取り込んで、座標などの変数を埋める。

魔法式を投射する。

投射された魔法式はイデアでエイドスを書き換える。

この一連の動作の速度を測るのだ。

『278 m s、2回目をどうぞ。』

再び行う。

『261 m s。』

まあこんなものだろう。栢が自分用にカスタマイズしたC A Dでやれば反射限界と
ほぼ同じ200 m sに近づくだろうが、共用C A Dならこんなものだ。

栢としてはこの成績なら首席だと、確信していた。

だが、
総代の話は来なかつたのだつた。

入学編

入学式

4月1日。

日本はとある機密を解除した。

戦略級魔法師『藤堂亞莉沙』と、戦略級魔法『精靈砲^{エレメンタル・キヤノン}』。

そう、栞の事だ。

もちろん偽名なので、直ぐにはバレないだろうが。

他国は一様にエイプリルフールと思ったようだが。（イギリスの英國面兵器の機密解除も4月1日のことがあり、エイプリルフールと思われたという逸話と同じである。）

藤堂亞莉沙は御巫栞を発表するのは高校卒業後を予定していると言っていたが、どうなることやら。

だが、栞の中ではそんなことよりもある事でいっぱいだった。

「そ、総合成績2位…」

雷電のハツキングで分かつた自分の成績と首席の人。

「司波深雪：人工的で禍々しい美しさね。魔法師はそういう人いないわけじゃないけ

ど。」

いわゆる左右が完全に対称である人だ。だが、あまりにも対称すぎて機械的な美しさがあると葉には見える。

「それは私たち自然のものと近い生活をしているからね。」

家の自室の畳の上でゴロゴロしながらそうポロリと漏らすと、真上に浮かんでいるハルからそう返事が来る。

「きっと機械的な処置が施されているのね、この子は。」

ハルはデスクトップに雷電が映し出している写真を見ながら話す。

「この学校、楽しそうね。こっちの子たちなんかは多分才能あるわ。」「この子たち？」

「…多分いけるわね。サイオンが持つかどうかはさておき。」

妖精は契約者のサイオンをどんなに遠くとも識別できるが、それは契約時に大量のサイオンを使って契約を更新しているからだ。

妖精の力に応じて使用サイオン量が変わる。

「北山零と光井ほのか…ね。」

「特にこっちの北山零って子は才能ある。3人くらいは契約できそうよ。」

妖精の契約に必要なのは、契約をするためのサイオンと、自分の属性、妖精の契約枠

だ。

属性についてはのちのち語るとして、契約枠について記す。

契約枠とは、同時に契約できる妖精の数で、妖精遣いとしてはこれが2以上なら一流と言われる。ちなみに、栄は7枠あるという。妖精遣いの中でもチートっぷりが激しい。

これらの数を知るためにはハルや他数人の長期間の妖精歴がある妖精の感覚に頼らざるを得ないのが現状だ。

「ま、可能ななら仲良くなりたいかな。」

「そう。」

そもそも現代に野生でいる妖は自然発生か封印の解けた妖のどちらかで、前者はほどんど弱い、後者は新契約になるので契約サイオンがバカにならないので、妖精にすることができる人が少ない。中間が消えてしまっているためもはや妖精遣いが店じまいか、妖精が高値で取引されるような時代だ。

ちなみに吉田家も昔は手を出していたらしいが、妖の減少に伴つて時代を見すえて精神魔法1本に絞つたらしい。

(北山零…光井ほのか…彼女たちは果たして妖精に関わる運命なのかどうか……)

☆☆☆☆☆

そう思つていた時もありました。

「葉どこに住んでるの?」

「実家は山梨だよ。日照時間が長いから太陽光プラントがいっぱいあるんだよ。」
「へー。」

入学式の座席に見た時笑つてしまうような制服の差を見せられ、事を荒立てないよう
に前に座ると、その横には例の2人がいたのだつた。

「太陽光プラントかー。私と零は海の上にあるやつはよく見るけど…」
「フロート船?」

「そうそう。」

現代において、エネルギー源は基本的に太陽光発電である。

高効率化した太陽光発電システムによつてエネルギーは賄われている。

特に日本では海上にそれを設けることにより国土面積を発電施設に回すのをなるべ
く避けているが、もちろん地上にも日照時間の長い土地に多く作られている。

「2人は何か好きな物とかある?」

「最近は映画とかかなあ。コメディーとか。」

「私は魔法スボーツ。剣術とかも面白い。きっと昔の漫画のるろ剣にあつた神速は自己加速術式で、縮地は擬似瞬間移動とかそういうが近いんだろうなあとか研究するのも面白い。」

「かめはめ波は?」

「フオノンメーザーか衝撃波砲じやない?」

などと、3人は入学式そつちのけでおしゃべりにいそしむこととなつた。

入学式も終わり、ほのかが総代深雪のファンであることが判明した後、IDカードを受け取りに行く。

今IDIカードの作成技術はすごくて、窓口に赴いて名前を告げれば写真をその場で撮つて直ぐに作れる。

「秉どうだつた!?

「Aだよ。」

「やつたあ、私もだよ! 葉は?」

「私も同じみたい。」

どうやらA組は総合成績優秀者が集められる傾向にあるらしい。

☆☆☆☆☆

「わあ、おいしそう！」

「これは流石に、気分が高揚します。」

「秉、それは違う人だから。」

一高の正門から一高前駅までは文房具店や甘味処などなど様々な店で賑わっている。
この辺りの住宅地の利用者も多いが、1番は一高の下校時の時だろう。

その中でもおいしいと話題の甘味処に立ち寄り、それぞれ甘味を堪能している。

栄はおしるこ。

秉は黒蜜きなこ餅。

ほのかは白玉クリーム小倉。

「ほのか、ひと口ちようだい。」

「いいよ、はい、あーん。」

あまり表情の変わらないと見える秉の目のハイライトが増える。きっと今なら遠征
大成功だ。

「だからそれは違うつて。」

雲が幸せそうな顔を見せるのを横目に、葉もほのかからひと口貰う。
「はい、あーん。」

「あーん。――――!? ……これはおいしいね。おしるこもひとつどうぞ。」
「ありがとう。じゃあ――――あーん。」



「む！ 私の甘味レーダーに何かが！」

「瑞葉ならさつきお皿割つてそれ片付けてたから、まだ出来てないと思う。」



「うーん、おいしかったね！」

「満足。」

「今度はあんみつかな？」

少し傾いた夕陽を背に駅前。

「うん、また明日から、よろしくね！ 霙、ほのか！」

「こちらこそ、また明日ね！」

「До свидания。」

「ロシア語なんて使う機会なくない？」

霧は口元だけでニヤリと笑うと、次の車両に乗り込んだ。それに一緒にほのかも少し手を振つてから同じコミューターに乗り込むのだった。
袴もドアを閉めるボタンをおして、最寄り駅に向けてコミューターを走らせるのだった。

一科生の能力つてそんなに高い？

現代の物流はとても便利なもので、魔法科高校ではあらかじめ必要なものを送つておけば手ぶらで登校することが出来る。

とはいってもカバンを持つて登校する生徒がいない訳ではなく、逆に半数を超えているだろう。

CADをカバンに入れている人もいれば、化粧品を携帯する人もいるし、タオルやティッシュなどを持ち歩く人も多いし、衛生用品を持ち歩く人もいる。

そんな中で、栞は化粧品やタオルや衛生用品も持ち歩くためのカバンであることも確かだが、それ以上に妖精たちを連れて歩くための入れ物でもある。

「なんで私を連れていくのよ。雷電か雷火でいいじゃない。」

〔楓は校内とか非殺傷戦闘なら使い勝手いいからね。〕

「はあ!? 私が弱いっていうの!?」

〔照れてる。〕

「ちょ、違うし！ 別に照れてないから！」

「楓は本当に栞のこと好きだね。」

「響！私は別に栞のことなんて…！」

「そう？私は好きだよ。思わず割れ目を擦り付けたいくらいには。」

「…だから響は連れてきたくなかったんだよね。」

「まあまあ、おふたりとも落ち着いてくださいな。」

今日連れてきているのは3人。楓、響、紗彩の3人だ。

(ま、この3人ならある程度の柔軟性があるからね。何があつても対応できる。)

とここ駅から歩いて教室に入る。

やはり日本人離れした栞の容姿は目を引く。

先天性色素欠乏症の中でもII型（OCA2）と呼ばれるタイプのそれだ。現代の医療技術によつて眼の治療はナノマシン等で可能になり、肌も高性能なサンスクリーンが出来ているので、日常生活には支障はない。

とはいゝ、銀髪に淡青色の瞳と白い肌は外国人の観光客が2020年代に比べて少なくなつたこともあり、とても目立つ。

ちなみに、髪は染めても半日で落ちる。瑞葉の浄化作用が働いてしまうためだ。異物

を浄化することにかけては瑞葉の右に出るものはいない。

御巫^{みかなぎ}なので、光井^{みついい}の前の席であつた。

まあ、ほのかは零の方にいたので、カバンを置いたら零の方へ向かう。

ついでにカバンから紗彩を連れ出して肩に乗せる。

紗彩は透明になれるので可能な芸当である。

「おはよう、零、ほのか。そちらは初めましてですね。御巫葉と申します。司波深雪さん……ですか?」

(……次席の……お兄様が何か写真を見ながら固まつてた方……はつ!まさかお兄様この
ような方がお好みなのですか?!いやいや、待つのよ深雪。お兄様に限つて方に一つもあ
りえないわ。……方に一つを度々求めてる私に言える義理ではないかしら……)「初
めまして。光井さんたちのお友達?」

「昨日の入学式で。」

「私は本当は試験会場でも一緒だつたけど。」

「え? 零と一緒だつたの?」

「うん。キヤパシティの大きさならほのかに勝る人はそうそういないと思つてたけど、
あのテストでらくらく100工程やつてた。」

「……」

その時、オリエンテーションの開始を告げる音声がかかつた。

「皆さん、入学おめでとう。1—A指導教官の百舌谷です。」

全員が着席した時、教室に背広を着た男の人が入ってくる。

「難関である一高の入学試験。それを突破した200名の中でも優秀な成績、または潜在能力の高そうな方達により構成されているクラスです。首席の司波さんだけでなく、皆さん全員が期待を背負っている事を忘れないでください。実際に魔法師として活躍している先生方の貴重な授業を受けることができるの一科生だけです。これは魔法師の絶対数が少ないためと言わざるを得ません。皆さんはこの機会を逃さず、大きく利用し、大いに学んでください。この後は専門科目の見学です。見学の後、選択科目を選んでいただきますので、しつかりと見てください。教員による引率はそれぞれ配つてある通りの時間に行われますが、他に見学したい授業があれば自主的に行動してもらつても構いません。」

百舌谷はそれだけ言うと教壇から降り、教室を出ていった。

☆☆☆☆☆

4人は指導教官について見学することにした。

その際、深雪に手を出そうとした男子数名をほのかのファインプレーですげなくあしらつたのは、ご愛嬌である。

「この実験は放出系魔法の基礎を学ぶものです。摩擦によらず静電気を発生させ、空中放電で帶電状態を解消する実験です。」

指導教官は実験室の前で止まると、解説する。

「そうですね：放出系魔法とは何か、説明できる人はいますか？」

いきなりの問題に、多くの一科生は答えが分からずザワつく。

そんな中、先程ほのかにすげなくあしらわれた男の子がドヤ顔しながら手を擧げる。

「はい、先生。」

「森崎くんですか、どうぞ。」

「放射線を操作する魔法ですか？」

「ふむ、間違いではありませんが、不十分な答えです。20点と言わざるを得ません。質問に対する回答に疑問形を用いることはやめなさい。自分の答えに自信がなくとも、それを見せるべきではありません。それが無ければ40点といったところでしようか。」

その採点に一同は一瞬にしてこの先生の授業では気をつけなければ、という考えに至つた。

「では、司波さん、どうですか？」

「はい。放出系魔法は素粒子及び複合粒子の運動と相互作用に干渉する魔法です。」「簡潔にまとめられたなかなか良い回答です。」

「ありがとうございます。」

深雪は腰を折つて礼をする。

「では、今回の実験で行つてある放出系魔法による帶電放電実験ですが、電気を操る魔法はどう作りますか?」
「では、御巫さん。」

「はい。そもそも、電気自身に干渉することは不可能です。広義での電気とは、自由電子や電荷を帯びた粒子の運動全般を指す概念のことです。狭義での電気、電流・電圧に干渉するのでしたら加重加速複合系が一般的です。しかし、今回の実験のような空中帶電及び放電には不向きであり、放出系魔法を使わず、摩擦によらない静電気帶電及び放電を行う時は収束吸収複合系を用いるべきでしよう。」

「完璧な答えです。」

(雷姉妹を使う上で必要だつたからね。その辺の物理。)

「午後の見学は実技棟前に13:40集合です。それでは一旦解散とします。」「「「「ありがとうございます。」」」

全員が背を見せて去る先生に向かつて腰を折つて礼をする。

25 一科生の能力ってそんなに高い?

「さ、 ジ飯行こう!」

ほのかの声に3人は答えながら食堂へ向かつた。
この後面倒なことが起ることは4人とも考えてすらいなかつた。

いざこござ

そう、それは2度目だつた。

「いい加減にしてください！」

事の発端は深雪の兄、二科生である達也とその仲間たちと深雪が一緒に帰ろうとする時に一科生の自己中な人達が深雪を奪おうとしているのだ。

ちなみに同じようなことが昼の食堂でもあり、その時は達也が折れて事なきを得たが、今度ばかりは折れるも何もない。

「なんの権利があつて2人の仲を引き裂こうとするんですか!?」
 （引き裂くってそんな：美月つたら何を勘違いしてるのでしら？）

美月の堪忍袋の緒が切れた言葉に、深雪の場違いな妄想が膨らんで「ドキッ、キュン、
 ぼつ」というような効果音が深雪の中に響く。

「きっとそのままベッド・インだね。」

〔響は黙つてて。〕

「ん？ 柄、なんか言つた？」

(?!) 霊は妖精の声を聞けるの?! 修行も妖精と契約してゐる訳でもないのに…これは才能ある!) 「別に何も言つてないよ。」

「そう。」(何か絶対言つてたんだけど…)

一科生のグルーピーの急先鋒はすげなくあしらわれた男の子だ。どんだけ深雪に一眼惚れしたのやら。

「だいたいキミたちはなんで楯突くんだい？ ウィードのクセに……いいかい？ この魔法科高校は実力主義だ。その実力で劣つてゐるキミたちは、つまり存在自体が劣つてゐるとみなされるんだよ。身の程をわきまえたらどうだ？」

「それが…一科生の総意ですか？」

「違つ」「当たり前だろう？」

ほのかが思わず否定しかけた言葉を塗りつぶすすげ男君。確かに名前は森山。

「モブ崎じやなかつたつけ？」

〔しー。〕

イラッとしたながらモブ崎を見るほのかだが、誰もこちらは見ていない。なぜなら、紗彩の魔法で存在を偽つてゐるから。面倒なことになる前にほのかと霊も効果範囲に含めている。

「お、同じ新入生で、今の時点であなた達がどれだけ優れているって言うんですかっ!?」「いいだろう…その差、思い知らせてやろうか?」

「霁とほのかはまさかと驚く。

「二科生…風情がああ!!!」

モブ崎がホルスターから高速でCADを引き抜きながらCADのトリガーを引く。

「特化型!?」

「攻撃魔法!」

霁の予測通りだろう魔法の起動式がCADからモブ崎に送られ、二科生の1人、千葉エリカが警棒で弾き飛ばす。

(いや、なんだ!? 弾き飛ばされる前に C A D から起動式は取り入れたはずだ!なのに何故エアブリットドが発動しない!?)

(間に合わなかつた!?:でもなんで魔法が発動しないの!?)

この時だけはモブ崎とエリカの思いは一致した。

(何が起こつた!?)

恐らく、エリカが間に合つたと周囲は見ているだろうが、それが違うと分かるのは当人達2人と達也と、そして――

「ええ加減にしなさい、モブ崎。」

「俺は森崎だ!」

「ぶぶつ!!」

「なんで笑う!?

「いやー、幼なじみと同じような返しだつたから。あははは、あはははははははは!」

笑いの止まらないエリカはほつといて、一科生の前に立つのは栞と紗彩だつた。

(あれは、まさか妖精か! 本物をこんな所で見れるとは…!? 精霊の眼を受け付けないのか!)

「自分より下の人間だからといって威張つてなんでもしていい訳では無い。小学生でも

分かること、あなた達は分からぬの？それなら魔法師になることは辞めるべきよ。魔法師だつて一人では戦えないもの。」

「だが！」

「まあ今日のところはあなた達の土俵に乗つてあげる。実力主義なんでしょう？一発でも私に攻撃を当てられたら私は退散する、当てられなければあなた達が折れる。制限時間は2分ね。あんまり時間かけても風紀委員が来ちゃうし。」

「いいだろう。同じ一科生にお前のような腰抜けは要らん！いくら同じ一科生でもこの人数差なら！」

一科生のグループは個々に魔法を発動するが、相克を起こす。

「あらあら、一科生だと威張つて強いぞーって言つてた方々が相克すらも理解してないなんて…」

「直接狙うな！間接攻撃だ！」

(…モブ崎は意外と手馴れてる。きちんと指揮が取れるのか。選民思想さえなければ御巫家で飼つてもいい能力がありそうね。)

「紗彩、対物障壁。防殻。」

「承知しました。」

(くそ！なんて硬さなんだ！ならば！)

(汎用型！別の魔法！) 「響、対光障壁。多分レーザー系来るよ。」

「了解。ご褒美は指で。」

「自分の右手でどうぞ。」

「ケチだね。栞の指だからいいのに。寝てる時使つてるかもしれないけどごめんね。」

☆☆☆☆☆

結局2分では終わらず、生徒会長と風紀委員長が来るまで続いた。
一科生の連中はことごとくしょっぴかれて反省文とあいなつた。

「いやー、あれ止めてくれたの栞だったのかー。」

森崎の魔法が発動しなかつた理由は栞自身の領域干渉だった。

「うん。間に合つてよかつた。」

「2人も止めようとしてくれたんでしよう？ありがとう、雲、ほのか。」

「——！！し、し、雲！司波さんが、ほ、ほのかって！」

「うん、そうだね。」

「お兄様が言つたでしょ？ 私も深雪でいいのよ。」

「ん、分かつた、深雪。」

嬉しそぎたらしく、ほのかは酔っ払いのようになつていて、零に支えられている。

「私もいいの？」

「もちろん、栞もよ。」

「ありがとう。」

駅に向かいながらの会話は栞に高校生活を実感させるものだつた。

「ところで、御巫さん。」

「あ、私も栞でいいですから、達也さん。」

「どうか。栞、君の肩にいるのは妖精か？」

「うん。この子は紗彩。空の妖精だよ。そして——」

栞はカバンを開けると、2人が飛び出して栞の左肩に腰掛ける。

「こつちの黒髪の方が響。こつちのグレーの髪をサイドテールにしてる子が楓だよ。」

「よろしくお願ひしますね。」

「響だよ。…さすがにお兄さんのモノは入らないかな。」

「楓よ！ 別に栞のためじゃないんだからね！ 栞は見てらんないのよ！」

ちなみに、妖精は物理要素を持つため魔法技能がなくても見ることは出来る。だが、

魔法技能があつても声は普通は聞けない。それは妖精を使役する上で重要なスキルで、妖精と1人も契約してない人が妖精と会話するのはたいへん難しい。

「……葉、響つて……その、変態なの？」

「……やつぱり聞こえるんだ。零つて妖精遣いの才能あるね。ちなみに、響は年がら年中発情期のエロ妖精だよ。戦闘力は十分なんだけど……」

「なんて言つてるんですか？」

美月はつんつんと響を触りながら聞く。

「巨乳メガネさん、おっぱい舐めさせて。」

「巨乳メガネさん、おっぱい舐めさせて。だつて。」

「ひや、ひやい!?」

ほんつという幻聴の聞こえる速さで顔を真っ赤にする美月の固まつた細い指先を大きく口を開けてちゅぱちゅぱとしやぶる響。

「いくらお姉さんの指が細くてもさすがに太すぎたね。」

「とか言いつついつも私の指しやぶつてるじゃない。」

「葉のはその年代にしては細すぎるんだよ。もつと食べないと。おっぱい大きくならないよ？ 乳首だけ硬いからよく使つてるけど。」

「……葉、その……うん、気持ちちは分かる……よ？」

声が聽ける凧から同情と共感を受けて、栞は沈没するのであつた。

新入部員勸誘週間

高校1年生の男子を部活に勧誘する方法は簡単である。

部内の（比較的）美少女たちにユニフォームと称して手足を（場合によつてはお腹や背中も）露出させて勧誘に赴けばよろしい。

逆に、女の子は難しい。

人によつて『二二一』というツボが違ひすぎるのである。

そして、小さなグループのうち1人がハマると周囲も流れてしまうので、女の子を勧誘したい時は様々な手段を講じる必要がある。

だが、稀に漫画のようにハマってしまうことがあるのである。

[.....] o

「まあまあ、ほのか怖がりすぎ。」

6

今の状況になつた理由を語るには1時間ほど前、とうとう始まつた授業が終わつて教室で4人が集まつた時まで戻らねばならない。

☆☆☆☆☆

「噂には聞いてたけど、ウチの学校の新入部員勧誘週間つてホントすごいよねえ。」

「テントとか机とか学校から貸出されるしね。」

「深雪はクラブは入らないで生徒会だけ？」

「ええ。ちよつと他に手が回りそうになくて。勧誘週間だけでも追加予算のみつもりとか修理の手配・苦情受付：色々あるみたいで。」

「大変だね。」

深雪は少し話しただけで直ぐに生徒会室へ向かつていつた。

「私たちはどうする？」

「何かクラブには入りたい。」

「へえ、珍しい。」

「うん、魔法競技はよく見てたから。自分もやつてみたいなって。」

衆たち3人はこの魔法科高校での新入部員狩りを舐めてみていたのだ。

新入部員勧誘週間は正門前にびつちりとテントが設営されていて、ほかの場所でも校舎外では新入部員勧誘が激しく行われている。

……人が多すぎると感じる理由は幾つかある。

1つはO.B・OGが援軍として参戦していること。

2つ目は魔法競技クラブは校外の一般高に通う魔法技能者でも手続きを踏めば参加出来るため。

3つ目は――

「演劇部入りませんか！」

「軽体操部興味ないですか！」

「射撃部です！」

「落研です！」

「ハイビーチバレー部です！」

「スピード・シューイング、興味ない!?」

成績上位者である栢・雲・ほのかの3人は特に人が集まつてくる。いろんなツテで入試成績が漏えいしているのだ。そして、学校もそれを九校戦のために見て見ぬふりをしている。

なんか魔法科高校らしくない部活もない訳では無いが、それは3人の外見目当てだろう。

「ちよつ……つ」

「ん……つ」

「あ……詰んだ。」

押し合い引つ張り合いの待つさ中に——いや、中心にいるので、どうなつてるかはお察しである。

「もう……仕方ないわね。別にアンタのことなんてどうでもいいけど、私が苦しいだけなんだから!」

「ちよ、楓、ここで魔法使用はダメだつて。いくらやばくとも……」

「自衛目的ならいいんじゃない? 雷電が話してたわ」

「……うう……」

楓が強烈な下降気流を起こそうとした瞬間、人の壁が崩れて2人の女性が葉たちを連れ去った。

「バイアスロン部だ！」

「くそ！取られた！」

そして、その瞬間、楓の下降気流が発生してそこに集まっていた人は中心方向からの強烈な風に吹き飛ばされた。自業自得ではあるがふんだりけつたりである。

「…………なんで私だけ肩車？」

ほのかと零は片手で抱えられているが、何故か葉だけほのかを抱えている人の肩に上げられていた。

てか、比較的軽いとはいえる女の子1人を片手で抱えられる女…ゴリ（血の跡

「楓希？どこに氣体加圧魔法撃つたの？」

「ん？なんか失礼なことを考えてたみたいだつたからな。ちよいと。」

その時、ほのかが気がつく。

「えつ…!? わ、渡辺風紀委員長がすごい形相で追いかけてくるんですけど！」

「スピード上げるよ！上のちまいの、ちゃんと掴まつてろ！」

「ひああああああああああああああ！何この人たち——」

しかしさすがにスピードを上げても、魔法力はそこまで変わらない相手に逃走側は少女3人分の加重がある。加減速性能はあちらが有利だし、干渉力ソースの話をすれば速度性能もあちらが有利だ。

「ちよつと詰まってきた：か？」

「そうね。このままだと逃げきれないかも。」

すると一瞬髪の長い方が振り返り、C A Dを操作する。

「何よ！ 私のパクリじゃないの！」

だが、使い方としては上手い。

自らの後方に落とした下降気流は自らには追い風に、摩利には向い風になる。たが、摩利とてその手は何度も在学中に見てきている。直ぐにその下降気流を消し去る。

「おお！ 摩利のやつ腕上げたな！」

「ホント、やるじやない。」

今度は短髪の方が地面への干渉魔法を使う。

それに対処させる間にどうやら終着駅らしい。

「萬屋先輩!? それに風祭先輩まで! どうしてここに!?」「こいつら頼む。」

「新入部員よ。可愛がつてあげて。」

「ぱいっ、と3人を投げる。」

いやだから人は普通簡単に投げられません。

「またな亜実。」

「積もる話はまた今度。」

「それだけ言うと、OG2人は走り去つていった。」

「へえ、やるわね。」

楓が関心するのは、人が放り投げられてその落下地点に的確にCADを操作して圧縮空気のクツーションを作ったことだ。ただでさえ150cm後半の少女だとあっても体重は普通なら50kg台。その運動エネルギーを打ち消しつつ衝撃を加えない固さに圧縮する技術は驚嘆に値する。

「ん…空気?」

「…ええと、大丈夫? そろそろ魔法が切れるから足から降りてくれる?」

「あ。」

「はい。」

3人が降り立つた時、摩利が追いついてきた。

「おい、バイアスロン部！お前達現役生もグルなのか!?」

「い、いえ！」

「私たちは無関係です！」

「……あの、何かあつたんですか？」

「いや、無関係ならいい！邪魔したな！」

「あー……何となく事情はわかつたような……」

摩利は再び捕物に勤しむかのように全速でボードを走らせて、前の2人を追いかけていくのだった。

「つと、ごめんなさい。先輩たちが迷惑かけて：あなた達新入生よね？バイアスロン部部長の五十嵐亜実です。…もしかして、御巫栄に光井ほのかに北山零…さん？」
「私たちのことご存知なんですか？」

「えっ、うん、まあ、ちょっとね。」

亜実は少し慌てたように繕うと、少し咳払いしてから改めて話し始める。
「その様子だと入部希望って訳ではなさそうだけど、一応聞いてくれる？」

この時点では既に入部は決まっているようなものだった。

なぜなら、零がOG2人の逃走劇に魅せられていたのだから。
冒頭で話した通り、女の子は数人のグループの中で1人が勧誘できればなし崩し的に流れてしまうのだから。

こうして、SSボード・バイアスロン部は成績上位者3名を擁する部活となつたのだつた。

お使い、よろしくね！

風紀委員となつた達也を攻撃する者達のことを調べようとする3人の少女たちのことは雷電の電腦世界情報収集によつて分かつっていた。

「だから、あの3人が危ないことしようとしたら守つてあげて欲しいの。お願ひね。」

「…しばらくは栞の下から離れるけどいいのですか？」

「構わないわ。あの3人、雷電じやないけど、危なつかしいから。裏の道を見たことない無垢な子達だから。」

「分かりました。じゃあ行つてきます。」

「あ、待つて。」

「…？——！」

お使いに早速出かけようとする紗彩を引き止めて、栞は紗彩の頬に（サイズ感が違うので口マンチックにはならないが）キスをする。

すると、紗彩の着ていた（正確には衣装も体の一部だが）服がシンプルなワンピースからポップなオフショルダーワンピースに。

「私の干渉力を少しだけ分けておいたから、いつもより強く魔法が使えるよ。上手く

使つてね。」

「…ありがとうございます。では行つてきます。」

紗彩は御巫家の屋敷から飛んで行つた。

「さて…響…より雷火の方がいいかな。雷火は雷電の言つてたブランシユを探つてくれる?」

「ふつ、別に倒してしまつてもいいのだらう?」

「いや、探るだけにしておいて。表立つて動くのは得策じやないわ。今家の業務を増やしたくないもの。」

家督を継いで、分家との仲も父が生きているからギクシャクしていなが、それでも反発は強い。しかも父の寿命はもうそんなに長いわけではない。父が事切れた時、分家がどのように動くかは分からぬ。

その準備も進めなければならないのにこれ以上業務を増やすのは下策と言える。
「雷電は例のアレを続行して。瑞葉、今日は甘い玉子焼きにしてちようだい。楓、響は私に付いてきて。さ、今日も学校行きましょう。」

☆☆☆☆☆

「あれ？ 栢焼けた？」

学校着いて、直ぐにほのかに言われたのはその一言だつた。

「あ、夏用のサンシェード使つちやつたかも…」

メラニンの生成が出来ない栢は、家に全自动サンシェード全身塗布装置を設けているのだが、そのサンシェードは色をある程度変えられる。やろうと思えばアバターも不可能ではない。

その中でもよく使う6種類は番号で色の設定を省略出来るようにしているのだが、その番号を間違えてしまつたようだ。

「前から思つてたけど、栢つてアルビノなんだね。」

「うん。日は数ヶ月に一回ナノマシン入れてるから問題ないけど、肌は家にサンシェードの塗布装置があるから、それで夏用は少しだけ色つけてあるんだ。」

「へえー。」

だからこそ、ホクロも出来ないし将来的にシミも出来ない。まあ紫外線を浴びればその分皮膚がんになりやすいんだが。

「でも、今のサンシェードはすごく性能いいから、塗つたらフィルムになるでしょ? だからみんなも塗った方がいいと思うんだけどね。フィルムだから1日落ちないし、使いやすいや?」

「あはは…」

「私の家にはあるよ。」

「零の家置いてあつたつけ?」

「うん。私焼けるの嫌いだから、お父さんにお願いした。」

「…もしかして全自動?」

「うん。」

「羨ましい…」

「私の所もそうだよ?」

「え、この中で全自动装置ないの私だけ!あれ!置いてある家の方が少ないはずだけど!!」

全自动サンシェード全身塗布装置の一般普及率はなんと1・2%である。単価はもちろん、メンテナンスも補充剤もそこそこする。そこまでして置くくらいなら普通に塗

るという人がほとんどだ。

「私は医療保険で出るから。」

「なるほどね。」

まあ出なくても買えるくらいの実家ではあるのだが。

☆☆☆☆☆

その日の夜、ほのかが雫の家に泊まるようで、それについて行つて家まで見送つた（透明化したまま）紗彩は急いで帰宅していた。

（司波深雪は九重八雲と繋がつていた！これは栄にお伝えしなければ…！）

赤毛のB組の少女を含めた3人はよりもよつて紗彩が張り付いたその日に、尾行なんとして撒かれて逆に窮地に陥つていた。

紗彩は最悪に備えて障壁魔法を展開する一歩手前でいたが、その前に深雪が援護に入つたのだった。

（それにしても…雫やほのかが伏せるほどのキャストジャミングをものともせず魔法を行使するとは…事象干渉力が高い？ 雫以上に？ 雫は百家の平均を上回る魔法力を有し

ているのに？…九重八雲との繋がりといい、兄の司波達也の異常な体術の強さと魔法技術といい、果てには生徒会室に霜が降りるほどだとか。司波家の本質はもしかしたら……）

紗彩の危機感を共有するのはもう1人だけいた。

（ふう…いいわ。とりあえずプランAは終了。当面は経過観察かしら？）

電腦世界でとある工作をしていた雷電は、ようやく一仕事を終えてもとのサーバーに戻ろうとした。その時、不意に異質な通信形跡を見つけた。

（え？…これって…国防陸軍の特殊部隊が一般回線に割り込んでる？内容はもう時間が経ちすぎてあらかた削除されてるけど…この割り込み先、葵の同級生だった子のそれよ

ね？……司波家……断片的にサルベージできるかしら。……特尉、トーラス、101
？ダメね。電腦世界だと検索は出来ないから一旦戻りましょう。それにしても……
司波達也は軍の特殊部隊から通信を受けるような人物なの？）

☆☆☆☆☆

「——うん、2人ともご苦労さま。言いたいことは分かつた。」

達也がシルバーの特化型CADのシルバーホーンを使っていることを踏まえれば、
トーラスというのはトーラス・シルバーのことだ。

F LTは軍にCADを卸しているメーカーのひとつで、特に有名なのはトーラス・シ
ルバーのループ・キャストだ。

「明らかに司波家はおかしいことは分かつたよ。資料を見る限り、父親である司波龍郎
はFLTの株主。恐らく椎原辰郎は彼の偽名だよね。……若しかすると、あの魔法技術
はトーラス・シルバー本人だからかもね。そうなれば軍との繋がりも分からなくなる。
特に101旅団だつけ？あそこは魔法の専門部隊でしょ？」

「そうよ。さつき調べたもの。」

「ですが、それは九重八雲との繋がりは見えてきません。」

「……もしかしたらその旅団に大天狗がいるのかも。風間玄信と言えば九重八雲門下の筆頭でしょ？ 彼がそこにいれば、それを介して九重八雲との親交もあるのかもしれない。」

「……情報が足りませんね。」

「あ、今見つけたんだけど、司波家と四葉が秘匿通信してる記録があるわ。」「……なるほど、四葉なら納得できますね。」

「つまり 司波兄妹は四葉関係者。それなら九重八雲との接点も軍とのコネクションも、
F フォア・リープス・テクノロジー
L Tも、深雪の十師族並の魔法力も、一直線に並んだね。」

四葉家アンタツチャブルと国防軍、そして九重八雲。

葉と2人の妖精は司波家の秘密の大半を暴いたのだつた。

少女の叫び

葉はその光景を見て柄じゃないほどに焦っていた。

(ブランシユがハイパワーライフルとか聞いてないけどお!雷火のアホオ!)

ブランシユの調査を命じてあつた雷火曰く、「葉の力なら楽勝な相手だぜ。ろくな装備もねえ。」だそうで、防御や隠遁が得意な紗彩を秉に、戦闘力の高い雷火をほのかに回していたので、手元にいる手札は殺傷力の低い楓とドジつ娘瑞葉だけだ。雷電は電腦世界でブランシユ全体の指揮系統の破壊に勤しんでいる。

葉の魔法力は零以上深雪以下。

その魔法力の一部を楓に分け与えて背中を任せているのでハイパワーライフルなどを受けたら一溜りもない。

(くつ：中華街の若作りが！余計なことしてくれー！)

周公瑾がここで手を出すとは思わず、葉は思わず内心口調がみだれるが、そんなでもハイパワーライフルによる射撃は止まつてはくれない。

ハイパワーライフルの特性上連射性と機関部の脆弱性はどの国でも対魔法師戦力として危惧されるものの一つだ。

だが、それも一度に4丁のそれが構えられたらそんな悠長なこと言つてられない。
 （障壁魔法だと破られる！ならば！）

加速系魔法とは、ベクトルを操る魔法である。とされているが、それは間違いだ。どちらかと言えば『ベクトルを加える』魔法だ。ベクトルを加えることによつて合成ベクトルが結果変わるという訳だ。つまり――

「はね返せなくとも、軌道を反らす位は出来るのよね。」
 とはいゝ、情報強化でもされてたら無理なんだが。

（あ、魔法師にハイパワーライフル持たせたら強そうね。）

葉の思考（妄想）がサディスティックなのはともかく、防戦一方なのは否めない。

〔瑞葉！ やらかしてもいいから1発デカいの！〕

「は、はい！ 頑張ります！」

瑞葉は葉の肩から地面に移動すると、地面に小さな掌を向け力を込める。

「え？ ええ？ わ、わわわわ！」

瑞葉は地下水脈から水を呼び寄せた。

だが、それは間欠泉並の量と熱を有するものだつた。

「熱つ！ 瑞葉！ いいから撃て！」

「は、はい！ごめんなさあい！」

「熱々の温泉（約100。C）を浴びたブランシユメンバーは葉を撃つ所ではなくなる。
「今が好機なり！楓、瑞葉、ヅラかるよ！」

☆☆☆☆☆

「くつ！」

「零！」

「こちらもハイパワーライフルに手間取つていた。

「オラオラオラア！雷火様のお通りだ！」

「バカですか！？マルタイをほつておいて敵に突撃する馬鹿はいません！」

「くそお！弾持つてくれば良かつた！」

「ここで戦略級魔法使う気ですか！？」

「ああん？力なんて使つたもん勝ちよ！おらあ！」

「いやだから、突っ込むなつってんやろ？」

紗彩はキレるといつもの丁寧口調からエセ関西弁になります。しかも中途半端な工

セ関西弁です。

「自分、ここで1回正座しろや。」

「嫌だね。オレはオレの道をゆく。ごーいんぐまいうえい。」

大して発音の良くない英語が煽つて いるようにしか聞こえないが、雷火の守備する方角の敵はどんどん減っていく。

そんな中、図書館棟屋上からキラリとした光を感じた零はほのかを自分の体ごと押し倒す。

「パン……パン！」

「そ、狙撃!?」

「ハイパワー ライフルの狙撃型だね。口径が伸びてる分初速も速い。でも、連発出来ない。」

狙撃型ハイパワー ライフルのほとんどはボルトアクション方式である。これは機関部の脆弱性を連射性の更なる低下を許容しても改良したい所であつた。

「ほのか、光学術式、レーザーならここからでも！」

「うん！」

部活用の遠距離支援CADでこちらも狙う。

周りは栞の妖精さんを信頼して任せている。

零の手持ちでは殺傷力が高すぎるが、レーザーならいい具合に調整可能だ。

「零、観測お願ひ！」

「うん。」

「発射！」

ほのかが発動したレーザー魔法は銃口の先にある魔法式座標から一直線に狙撃手へ向かう。ほのかのCADのスコープはレーザーの光で見えづらいため、零は自分のCADのスコープをのぞき込む。

レーザーは光なのである程度距離があると曲がつてしまう。それを計算に入れて指示を出す。

「近弾。左、1ミル。上、0・3ミル。」

「了解！」

2発目を撃つ。

「命中！狙撃銃機関部に命中！敵狙撃手を無効化！」

「やつた！」

果たして、ほのかの魔法が凄いのか、零の観測感覚が凄いのか。

☆☆☆☆☆

一高の中のテロリストを一掃した所で、部活棟前に集まっていた生徒達の中には零、ほのか、栞の3人の姿もあつた。

だが、栞は明らかに様子がおかしかつた。

「いやあああ！」

「瑞葉 やかましい！雷火んとこ行つとけや！」

紗彩は必死に止血するが、元より回復系は苦手。妖精の中で回復に秀でているのは響だが、彼女は別任務で近くにはいない。

紗彩に余裕がなくなるのも当たり前だ。

「はあはあ：紗彩、私は大丈夫だから。銃弾も貫通銃創だから。」

「何言つてるん!? 太ももの血管撃ち抜かれよつてからに！」

栞は離脱する時にほのかたちを撃つた狙撃手に狙われていた。

ちなみに瑞葉も回復系は素養があるが、取り乱していてそれどころではない。

『はい保健室。』

『あ、安宿先生ですか？』

『ごめんなさい、会長の七草よ。』

『1—Aの北山です。部活棟前に重傷者1名。大腿部貫通銃創。動脈損傷、出血多量。意識レベルは1。名前は御巫栞。同じく1—Aです。身体の大きさに対しても出血量が多く意識レベルが上がる可能性があります。彼女付きの妖精が回復系術式で治癒を試みていますが芳しくありません。』

『直ぐに緊急搬送車両を用意するわ！安宿先生もそちらに向かってもらうわ！』

〔紗彩、雷電に伝えて。もし私が意識を取り戻さなくともプランAはフェイズ2へ移行してつて。お願ひ……ね。〕

それを最後に栞は目を閉じた。

「安宿先生！通報時から容態急変！意識レベル300！」

「間に合わないわ！ここで止血縫合します！」

「栞いいいい!!!!」

ホントにホントだよ

「……知らない天井ね。」

お決まりを地でやる。それが葉クオリティ。

「まさか再び私を使う人が出るとはね。」

「ハル？」

「私の真契約条件は一度死ぬこと。あなたはもう死んだのよ。」

「は？」

「私は契約者が死ぬことをトリガーに全能力を解放するわ。私の真の能力は反射。いかなる攻撃も、なにもかも反射出来る。そして、解放時にのみたつた一人だけ黄泉の国から連れ戻せるの。冬という死の季節から春を取り戻す。だから私の名前はハル。黄泉がえりの妖精にして、妖精殺しの妖精よ。」

ハルは全ては語らなかつた。

全能力を発揮しているハルは3人分の契約枠を食う大妖精である。

そして、溢れた契約枠から弾き出されるのは1番後に契約した妖精2人だ。

ハルを除く契約順は瑞葉→楓→紗彩→雷火→雷電→響の順。

つまり、溢れたのは強力な電子戦能力を持つ雷電と、2番目の戦闘力を誇る工口大魔

王だった。

☆☆☆☆☆

「葉、お加減どうかしら？」

深雪は病室に入ると、フルーツの盛り合わせをチエスターに置く。

「別になんともないよ。」

葉の身体は死んで、蘇った時に全快していた。

だが、そのショックが残っていたので起きるまでに時間がかかっただけだった。ちなみに既にブランシユのリーダーに操られていた剣道部を中心としたエガリテメンバーは記憶操作を直した後に既に退院している、6月の始まりだった。

「嘘おつしやい。あなたまだ歩けてないと聞いてるわ。」

ショツクが残るというのは、脳にダメージを与えていた。
撃ち抜かれた右足が全くという訳では無いが動かないのだ。

「手すり持てば歩けるよ。」

「手の力だけででしょに。」

松葉杖で出歩くのは筋力の元から少ない栄の体がさらに細くなつてそれを困難にして今では車椅子生活だ。

「それこそ今度は腕が疲労骨折するわよ？」

「あはは…」

それはハルにも言われていたことだ。

今やスポーツ用を除けば、電動車椅子が主流となつていた。なので、なるべく骨や筋肉を傷つけないように車椅子を使うように言われていた。

リハビリ科で適正な刺激を与えて筋力と骨量の回復を図つてはいるが、芳しくない。

「…お邪魔?」「栄、シュークリーム買つてきたよ。」

栄とほのかが病室に入る。

ちなみに、個室だ。

「栄…」

「栄、皆まで言わないでいいよ。ハルは何も言わなかつたけど、契約状況位は妖精遣いな

ら意識しなくても分かるもの。…響と雷電という惜しい2人を失ったわ。せめて瑞葉が良かつたかしら。」

「私要不然の子ですか!」

「ふ、言われてやんの。」

「まあまあ。2人も人様の前ですよ?」

「別に私でも良かつたのに…」

「あはは！楓、キヤラブレツブレだぞ。」

「はあ!?ち、ちが…！別に栢の戦力のことを考えてた訳じやないわよ！」

「その…響と雷電、私とほのかに契約しちゃつた。」

その報告に栢と深雪と妖精4人は目を見開いた。

「…響とほのかが妖精遣いに…へえー。」

「栢、今はボク、零のうちの子なんだ。零の弟、可愛くて食べちゃいたいくらいなんだよ？寝てる時にまだ小さいヅツを――」

「響？默らないと命令でエツチなこと禁止にするよ？」

契約者の命令は契約によつて絶対に執行される。響からエロを取つたら彼女は欲求不満で壊れるかもしない。

「ごめんなさい、言わないからそれだけはやめて！この間されて、ムラムラして自分の擦つても全然気持ちよくなれないし濡れないし…逆にその環境で侵されてみた――」
「響、今からエッチなことを言うのもするのも禁止。」

「……」

響が喋ることを無くしたのを見計らつて、雷電はほのかの胸元から飛び出す。

「茉に比べたら座り心地がちが……いや、茉は座るのはブラで、胸は無いに等しかったわ。ほのかはちゃんとふかふかよ？」

「よろしい、ならば戦争だ。雷火、弾の貯蓄は十分だな？全能力をもつて雷電とメロン級危険物2つを有する主ほのかを殲滅せよ。」

「ちよつと雷電!? 何言つてくれちゃつてるの?」

冗談を理解出来る妖精さんたちによるミニバトルの横で、微笑む栂であつた。

☆☆☆☆☆

「プランAー、起動確認。」

「ねえ、雷電。前からよく聞くプランAーって何?」

「…そうね…栂が残した最後の命令よ。プランAをフェイズ2へ。…………よし、準備はこれくらいでいいわね。 そうね…ひとつ言えるのは、この命令に関しての命令権は未だに栂が持つてゐるわ。それ以外は言い様がないわよ? だつて他言無用つていう制約もついてるもの。」

「なるほどね……」

ほのかは家に帰つて、部屋着に着替えてベッドにゴロンと横になりつつ授業の復習をしていた。

「雷火からの命令伝達を受信。プランA→をプランB2へ移行する。了解したわ。：これで終われば栂との繋がりも本当に切れるのね。」

雷電は少しだけ感傷に浸りながら、電腦世界へ潜つて行つた。

☆☆☆☆☆

「よう、姉さん。準備はいいか？」

「ええ。もちろんよ！」

雷姉妹が同じ主の下、共闘するのは、これが最初で最後だろう。

「プランB2、発動。」

「了解した！ プランB2に則り、強襲を行う。」

「……雷火、気をつけるのよ。あなたが死ねば栂の矛はいなくなるわ。」

「分かっているさ。必ず帰る。」

電腦世界で2人は抱きしめ合う。

「キスでもするか？」

「いいわよ？ おいで？」

「ウソだろ？」

「私の胸ならいつでも飛び込んできていいのよ？」

「それは今の主にでも言つとけ。」

「逆ね。今の主は飛び込んでいくほうよ。谷間に。」

「後でチクツといてやろ。」

そんな軽口を飛ばしながら、雷火はとても豪華なドレスを纏い、電腦世界の奥先へと飛翔して行つた。



昨日深夜、旧カナダケベック州モントリオール郊外は轟音と共に巨大な振動を受けました。モントリオール中心部は綺麗にクレーターとなつており、そこにいた5万を超える人々は亡くなつたものと見られています。連邦政府はこの事件の原因を、旧カナダ時代にあつた地下のガス管の長期にわたる破損による残存ガスが大量に溜まつていたところに、最近穿孔した長距離地下鉄の酸素が混合され、爆発的な酸化反応を起こしたためと結論づけました。

しかしながら、ケンブリッジ大学の物理学教授であるサイモン名譽教授を初めとする一部の有識者グループは「これはガス爆発で起るものでは無い」と断固否定。国による再度の検証を求めています。

☆☆☆☆☆

「お疲れさま、雷電。最後にプランZを発動。クラーク親子及びその関係者の死亡確認、フリーズスキアルブメインシステム及び構造データの破壊確認、エシユロンⅢのバツクドア封鎖確認を行つて。」

「了解したわ！任せなさい！」

栢は車椅子の背もたれに体重を預けて、退院したばかりで背中に見える病院を見やりつつ、電動車椅子をわざわざ押す物好きに目を向けた。

「わざわざ家まで押していかなくとも良かつたのに。ありがとね、零。」

栢の膝のひざ掛けの上には花束。ほのかたちからだ。

ついぞ動かなかつた右足。おかげで車椅子生活は続く。

「？私は栢の家に送つていくつもりは無いよ？」

「え？」

「え？」

「どこに向かつてるの？」

「私の家に。」

「え？」

「安心してよ。車椅子でも使える全自動サンシェード全身塗布装置があるし。」

「え？え？」

「…いわゆる、お持ち帰り？」

69 ホントにホントだよ

「ホントに言ってる?」

「ホントにホントだよ?」

雪は頬を紅く染めながら、表情に乏しい個性の中でめいいっぱい恥ずかしがりながらボツリと言う。

「今夜は寝かさないから……」

九校戦編

九校戦メンバー選出

葉はカプセル型の最新型の全自动サンシェード全身塗布装置に紗彩と共に入つていく。

紗彩は防御障壁や透明化に適性があるが、それ以上に得意なのは飛行魔法だ。どちらかと言えば重力制御魔法。

装置の中で目を閉じた葉は紗彩の飛行魔法で「ぶかぶか」と浮きながら中に張られた高濃度の塩化物を中心とする水溶液に降りる。死海などと同じ理論で、浮き上がるほどではないにせよ普通の水よりは浮きやすい。

そして、飛行魔法を紗彩が止めて装置から出ると、カプセルの入口が閉じてサンシェードの塗布が開始される。水面上に明らかに違う液体の層が出てくる。これがサンシェード。これを振動や内容水（塩化物の高濃度水溶液）の攪拌で全身に塗つていき、最後に凝固剤を散布して完成だ。

再び開いた扉から入ってきた紗彩が飛行魔法で体を浮かせながら外に誘う。体に付いた水滴を扉付近のエアブロワーが吹き飛ばして、内容水を身体につかないよ

うにする。

外に出た栞はそのままぶかぶか浮きながら装置の置いてある部屋から隣の栞の部屋に移動する。

そして、ベッドの上に置いておいた着替えからお気に入りのミントグリーンのふわふわしたパッドを入れた下着を紗彩に手伝つてもらい背中のホックをかける。そして、下も右足にかけるのが難しいので紗彩に履かせてもらう。

(……小さいから入れてるわけじゃない。)

と言い聞かせているが、実際はその通りである。かと言つて胸は成長してないわけではないので、ブラをしないと形が分かつてしまふし：何より痛い。

そして、体温を調節する能力を持つスリップと、魔法科高校第一高校の制服を着たら、紗彩は栞を車椅子に載せる。

そして、登校する。

これが退院してから既に2週間、ずっと行われている。



「あつ…………」

「…………」

一高の定期試験の迫った今日この頃に至つても、栞は雫を見る度に、少し距離を置いたような、慌てたような……と思い出したかのような仕草を無意識に行つている。

別に嫌いになつた訳では無いけど、なんとなくである。

だが、はたから見たらそれはそう見えてしまうものである。特に当事者からしたら、「…………」

雫はかなりの後悔を抱いていた。自分でもなんであんな行為に及んだのかなんて理解できなかつた。

自分が栞に対して抱いてしまつた想いは普通じやないことは理解できるし、そもそも魔法師としてはそういうことは忌避される。もちろんいな訳では無いが。

だが、この想いは心の奥底に眠らせるはずだつた。

でも、あの襲撃で分かつてしまつたのだ。

死ねばそれまでだけど、それはとても後悔する死に方だ、と。
もちろんそれだけではない。

ようやく栢が退院して自由になつて嬉しすぎた。

そして、あの時、血にまみれて意識を失つた栢を見て、怖かつたのだ。退院した時、もう失いたくないという思いが支配欲とか所有欲になつたんだと雪は思う。

だからこそ、今はただただごめんとしか思えなかつた。

そんな身勝手で、栢を貪つてしまつたことを。

☆☆☆☆☆

さらに時は流れ、定期試験を終えて結果が発表された。
栢の関係者や知り合いではこうなる。

総合成績

75 九校戦メンバー選出

司波深雪
御巫栄
光井ほのか
十三束鋼（ゼロレンジとして一方的に知つてゐる）

1位	1—E	司波達也
2位	1—A	吉田幹比古（同じ年の古式遣いとして知り合い）
3位	1—E	光井ほのか
4位	1—A	御巫菜
5位	1—B	十三束鋼
6位	1—A	柴田美月
7位	1—E	北山零
10位	1—A	明智英美
18位	1—B	森崎駿
19位	1—A	千葉エリカ
20位	1—E	西城レオンハルト
39位	1—E	E組の数人が上位層にいく込んでいることはさておき、零は本来の力を明らかに發揮していなかつた。
逆にほのかは雷電との契約で自分の魔法演算領域への逆流もあり、拡張され、成績順位を入試成績時から向上させている。		
：ちなみに、美月は明らかに達也の指導のため、という言葉を超えた能力を見せつけ		

た。理由は不明。

「……」

栢は、自分とのことで零が集中力を欠いていることを悟っていた。

（……あの時、逃げようと思えば逃げられた。でも、私は逃げたいと思わなかつた。……でも、どんな顔で会つたり話したりしてたのかもう思い出せない…どうすればいいの……？）

栢はあの時、嫌じやなかつた。むしろ胸がきゅんとした。あの時から毎晩思い出して、朝はサンシェードを塗る前にお風呂に入らないといけないくらいの状態になつてゐる。

どちらかが踏み出さなければ回復しない関係だとしても、どちらも踏み出せない。それもまた恋の病。

☆☆☆☆☆

定期試験結果・部活連推薦・生徒会推薦・通常授業での成績から割り出された九校戦の候補メンバーは2段階の選考をもつて選抜される。

そして、新人戦女子メンバーの発表会場に集まつた一次選抜メンバーはいよいよ競技ごとにメンバーが振り分けられ、当落が決定する。

「こんにちは。生徒会長は手が離せないほど業務がありますので、会計の私、市原鈴音がお話させていただきます。今日集まつて頂いた15名の九校戦新人戦女子メンバー候補の中から、最終メンバーを決定しましたので、お知らせに来ました。最大メンバーは10名です。これから呼ばれたメンバーは残つてください。呼ばれなければ、今回は残念ですがサポートメンバーに回つてください。それでは発表します。」

スピード・シユーテイング

御巫菜・明智英美・滝川和美

クラウド・ボール

光井ほのか・里美スバル・春日菜々美

バトルボード

光井ほのか・北山零・春日菜々美

アイス・ピラーズ・ブレイク

司波深雪・北山零・明智英美

ミラージ・バット

司波深雪・御巫栞・里美スバル

「以上述べ15名、計8名です。」

魔法科高校の年に一度の祭典へ、個人の仲がどうあろうと、時間は歩き始める。

九校戦練習

九校戦は1校での、同競技出場者は最大6名だ。本戦・新人戦の計6人だ。男女共通競技なら合わせれば12名となる。

冷却能力の問題からそう何度も行えないアイス・ピラーズ・ブレイクや、チーム戦であるため全員が揃わないとチームワークの向上を図れないモノリス・コードの2種目を除いて、メンバーは放課後を思い思いの競技を練習して良い。もちろん1種目だけの人はそれだけだが。

「じゃあ行きますよ？」

「お願ひね。」

栢は車椅子から水の中のように浮き上がる。

ミラージ・バットの練習場となつている屋内競技場。その中心にはミラージ・バットの会場のような高さの異なる円柱が複数立てられている。

予めくじ引きで決められた初期位置にたどり着くと、立つていることが難しい栢は円

柱に腰掛けて魔法を遮断する。

「御巫、準備はいいか?」

「はい、お待たせしました。」

今回練習に来ているメンバーは4人。

一高三巨頭が一角にして十師族並と称される力量もつ風紀委員長、渡辺摩利。三巨頭と同じ年代で他校には知名度は高くないがそれでもかなりの実力を持つ、小早川景子。

未知数な魔法特性のイケメンな少女でありミラージュ持つてこいな『跳躍』を得意とする、里美スバル。

そして、古式魔法の中でも全ての指向性で強力な適性を見せる妖精遣い、御巫栞。以上だ。

着替えて思つたより手間取り、他の人を少し待たせてしまつていた。

今日は衣装合わせも兼ねてるので本番さながらな衣装で試合をする。そのため、多数の衣装姿の美少女たちを見るために見学に来る男子があとを立たない…と言うより100人ほどが座れる観客席が満席である。立ち見もかなり多い。ちなみに女子もチラホラ…いや、まあまあいる。

かわいい系の栞。

かつこいい系の摩利とスバル。

様々な層を呼ぶメンツである。話に聞くところ、生徒会と部活連に『しおりたんを見守り隊』なる部活の申請が80人ほどの部員数（署名数）であつたらしい。

ちなみに、中条あずさ、御巫栄、明智英美の3人は、一高三大マスコットと言われており、既に『あーちゃんマジ天使部』なるものがあり、あーちゃん部は120人の部員がいる。（殆どは兼部している。）

なお、去年12月頃にあーちゃん部は真由美の強権もあり設立された。（真由美が部長）

ちなみに、それに較べると小規模だが、既に『エイミイがぐうかわつらん会』（部員48名）や『零のジト目に見つめられ隊』（部員21名）、『柴田美月のやわらかおっぱいおつきい会』（部員18名）、『ドジつ娘ほのかちやんをフオローザ隊』（部員17名）が設立されている。（一高が病気）

閑話休題。

試合開始のブザーが鳴ると共に、一斉に飛び出す。

栢は周りの飛んでる姿を確認しながらコースを選択、最適な目標をステッキで叩いていく。

この中で1番有利なのは圧倒的に栢だ。なぜなら飛べるから。だからこそ、上級生2人からのコース妨害も多い。目標となる光球に先に3m以内に入つた方に優先権があるので、後から来た人はたたらを踏むことになる。

だが、栢の機動性は3年生2人の想像を遥かに上回っていた。第一ピリオド15分を終える頃には、マイペースに跳躍していくスバルを除いて、かなりの負担を強いていた。しかも、スバルとて栢への妨害をしていい訳では無い。持ち前の認識阻害がたまたま妨害になつたということもあるが。

ブザーが鳴り、ピリオドの終わりを告げた。

たつた15分で、大きく差が出ていた。

1位	御巫栢	241点
2位	里美スバル	121点
3位	渡辺摩利	108点
4位	小早川景子	100点

その点差に、ギヤラリーはざわついていた。

「嘘だろ？ 風紀委員長が108とか。いつもなら150は堅いのに。」

「妨害しすぎたな。結果後半失速したんだ。」

「いや待てよ。妨害しなきやいいってことでもねえぞ？ 妨害集中されて241点だぞ？」

「景子たんhshs。」

「キモイ。小早川先輩のどこがいいのよ。」

「なんだと？ 貴様、渡辺党だとでも言うのか！？」

「私、渡辺先輩の方がかつこいいと思うもの。」

「…里美スバルちゃん…：かつこいい…：」

「貴様ら！ 柏たんの優さには勝てぬ！ 目を覚ますのだ！」

途中からミラージ・バットの話ではなくなつていたので、これから先は割愛するが、下校時間まで『推し』の話が続いたらしい。

「いやー凄いな。飛行魔法がどれほど有利か身にしみたよ。」

車椅子に戻った柏に摩利が話しかける。

「私はもちろん、小早川だつて強い。私たち2人の妨害でもあれだけの点数だ。新人戦

なら当たるところ敵無しだな。」

「ありがとうございます。とはいって、飛行魔法は私自身の魔法ではないので……」

「妖精だって契約してるお前の実力のひとつだろう？ 気にすることはない。胸張つてしゃんとしろ。三巨頭…の最弱とはい打ち破つたんだからな。」

「いえ、そんなこと…」

「こんなに強ければそのうち十師族から縁談でもあるんじやないか？ 御巫家が一人娘なのは知られてるから婿養子か。」

摩利の話した縁談という言葉。今の栞には、ズーンとのしかかる重しと感じられるのだつた。

☆☆☆☆☆

「紗奈、ただいま。」

とある普通の家。女の子が家に帰ると、そこには1人の妖精がいた。

「おかえり。ご飯にする？ お風呂にする？ それとも…？」

「じよ、冗談はやめてください…」

たつたひとつのイレギュラーが、ここにあつた。

九校戦最初のイベント

九校戦は8月3日から10日間の日程で行われる。

しかし、開会前の懇親会は8月1日の夜行われることになっている。これは1日挟むことで万全な状態で競技に臨めるようにという配慮である。

とはいっても、全ての高校が8月1日に会場入りするのは機材などの大荷物があるので大混乱を引き起しかねないため、距離が遠い順に会場入りをする。

8月1日に会場入りするのは最も近い第一高校だけだ。

栞は真由美が家の事情で遅刻している間、バスの近くにある作業車の1つに赴いていた。

雲と顔を合わせていてるのが苦しいからという理由もあるが、それ以上にこの車に搭載されている薬剤の残存量はこの夏では栞の生命線とも言えるものだからだ。

この車両は、御巫家として所有する作業車を改装して、サンシェード塗布装置を搭載

している。2日3日なら要らないが、10日を超えるとなると手塗りでは大変だし、ムラがあつてもおかしくない手塗りは避けたい。

そのサンシェードの液量と内容水の液量を確認しながら、機材の電気配線を確認する。そして、非常発電用オルタネーター、それを駆動させるバイオ燃料エンジン、その燃料の残量をそれぞれ点検する。

今では何かの影響で電源喪失した際の予備電源として以外はエンジンというものは使われていない。設置しているのは病院や軍事施設などの重要施設だ。

「栢か。七草会長が到着されたからもう出発するぞ。」

「達也、ありがと。」

「…会長はお疲れのようだから、あまり騒がないように深雪とほのかと雪に言つておいてくれ。」

「何かあつたの？」

「ああ。」

栢は達也に起こつたことを聞いて、少しあたずら心を刺激された。

「へー。…やっぱり達也つてシステムだねー。今のも深雪が少しでもよく見られるようについて配慮でしょ？…いいなあ、私兄弟姉妹いないから…」

「そうか。」

「あ！ そうだ！ 達也がお兄ちゃんになつてくれる？」

めいといっぱいかわいい幼女感を演出する栂に、達也はピクリと眉を動かす。

「…それは――」

「栂ー！ バス出るよ！」

達也の返事はほのかに遮られて、聞き取れなかつた。

栂は達也にじや、というようなジエスチャーをすると、車椅子の舳先をバスに向けてモーターを回し始めた。

達也はほう…とため息をついた。

(しかし、なんだつたんだ？ 今の感覚は。)

☆☆☆☆☆

ほのかは、席が決まつてから、本当に大丈夫か気になつていた。

ほのかの席は通路側左。通路を挟んで右に零、そしてその奥は栂となつてゐる。

零と栂がイマイチぎこちないことははたから見ていても十分分かる。しかも片方の零とはもう10年の付き合いである。それくらい分かるつもりだ。

だが、そちらも心配ではあるが、それ以上に恐ろしいのはほのかの隣の窓側の席。不

機嫌オーラップンパンの深雪である。

雪は雪で栄を意識していて、援護は望めない。

無言の悲鳴を上げながらバス旅の行程を消化していくのだつた。

深雪の不機嫌オーラは留まることを知らず、深雪の容姿（近くにいた3人にも少數）に引き寄せられる人達を追い払つていた。

だが、それにもお構い無しな2人に、その前に座つていた摩利は、
(まるで初々しい小学生カツプルだな。)

と、見ていた。

その時、千代田花音が外を眺めていると、対向車線に普段では見ない光景を確認した。
「危ない！」

対向車線には、レジヤー向けのオフロード車（バイオ燃料エンジン搭載がほとんど）が前輪をパンクさせて、火花を散らしている。

長距離移動用のハイウェイ（自走車用道路）は上り下りが壁で仕切られているので、比較的安全であり、多くの生徒は危機感がない。

次の瞬間までは。

オフロード車がスピンド始めて、壁に当たり、スピンドの速度が上方向の力に変わる。反対車線一つまり一高バスの目の前に飛び出してきた。

その瞬間、葉はバスの作動した回生ブレーキと摩擦ブレーキに加えて加速系魔法による減速が行われていることを把握し、葉はそれを助けるように摩擦ブレーキの摩擦係数へ干渉する魔法を使う。

直ぐに停車したバスだが、その相対距離はそう残されてはいない。

炎を上げながら迫つてくる車に、花音・森崎・雲が反応して車に魔法をかける。

複数の魔法師が、同一対象物に魔法をかける場合、干渉力がものを言う。だが、そのタイミングが同じでサイオンによる魔法式がエイドスを書き換えかけている状態が複数の魔法により起こると、全ての魔法が混ざってしまい、相克と呼ばれる状態になる。

「吹つ飛べ！」

「消えろ！」

「止まって！」

「つ！」

「バカ、やめろ！」

摩利の静止が聞こえるほど、彼女たちは場数を踏んではいなかつた。唯一森崎は相克

に気づいたが、彼も冷静さに欠く状態で、それを無理やり越えようと干渉力を全力に引き上げただけだ。

強力な魔法は現実を一瞬で塗り替える。それを可能とする生徒が集まるこの第一高校九校戦メンバーだが、それを判断するだけの冷静さはなかつた。

相克を起こした魔法式はキヤストジヤミングのような状態になつてゐる。つまり、干渉力が桁外れに強ければ無理やり魔法を使うことは可能だ。だが、九校戦メンバーに招聘されるような魔法技能を持つ生徒数名による相克は非魔法師のキヤストジヤミングを大きく超えた魔法阻害を行つていた。

「十文字！」

摩利が干渉力では三巨頭一を誇る克人を呼ぶが、克人は既に魔法発動の体勢に入つていたが、めつたに見せない焦りを浮かべた表情だつた。

「十文字先輩、私が相克状態を吹き飛ばします！ 炎と衝突に備えてください！」

栞は立ち上がって“特化型CAD”を構える。零は栞が特化型を使つてゐるのを初めて見た。

CADの軸先から、高圧縮されたサイオン塊が発射され車のエイドスに当たつて相克を起こしていた複数のエイドスに付加されていた魔法式を吹き飛ばした。

「……」

克人は加速系障壁魔法で衝突を防ぎ、収束系魔法で酸素を奪い取った。障壁にぶつかり、既に残骸となっていた車が完全に潰れる音がして、止まつた。

懇親会と九島

これから勝敗を競う相手と一緒に会するこの懇親会は、立食パーティーの形式をとる。

開会式のプレとも言わされており、例年和やかさよりもピリついた空氣を伴う。特に、得点を取り合う高校同士では鞘当が行われたりするし、他校のライバルへ個人的に宣戦布告したりなどの盤外戦術もある。心理状態に依存しやすい魔法だからこそ、盤外戦術は非常に有効だ。

そんなこともあり、三高の1年女子が深雪たちに絡んでいる所を栄は見つけた。

「——あらあ、一般の方でしたか。名のあるお方がと思つてお声掛けしましたの。勘違いでお騒がせしてごめんなさい。試合、頑張ってくださいね。」

「そういう態度は宜しくないので? 師補十八家として、一の家系の品位が疑われますよ。」

栢が車椅子を走らせながら間に割つて入る。

「貴女は？」

「名前を聞くのは自分が名乗つてから。礼儀すら学ばないような家なのね、一色家つて！」

栢は深雪とほのかを背中に、少し煽る口調で三高の女子3人に相対する。

「……師補十八家が一角、一色家長女の一色愛梨よ。」

「ふむ、まず上から目線なのは目を瞑りましょう。日本神話系・宮内系古式魔法の最上位家系、御巫家現当主、御巫栢よ。」

「つ!?」（御巫!？）

御巫家は古式魔法の家系の中でも、表舞台で活躍してきた家系で、皇室との関わりもあるほどの高い家格がある。しかも、ほとんどの魔法師家系が表向き持つことが出来ない政財軍界への直接的な影響力を奈良時代よりも昔から維持している家系だ。

御巫という姓も時の帝から承つたもので、御が天皇や皇室を意味していて、巫が巫女などの熟語から連想されるとおり魔術を初めとする儀式などに関わる家系を意味している。

遠縁ながら皇室との姻戚関係もある。

権力は形骸化してはいるものの、権威は非常に大きく、その権威は十師族の各家を上

回るとも言われている。だが、権力はないからこそ知名度は低い。知られているのは特に有力な数字付ナンバースきか古式魔法の家系だけだ。

「話には当主が変わつたことは聞いとつたが、本当にお主になつとつたとは……」

「？ 老子、知つてるの？」

「権力は無いが、どの魔法師家系よりも大きい権威を保持する古い家系じや。そして、わしの幼なじみでもある。」

後ろの2人がそう話すと、栂はわざと気がついたように話し始める。

「ああ、十七夜栂さんでしたつけ？ 深雪への紹介を遠くから聞いてただけなので間違いかかもしれないけど。同じ名前の者同士、仲良くなつたいわ。」

栂は深雪もゾツとするような冷たい満面の笑みを浮かべる。

「老子、貴女は友ならもう少し考えるべきね。何をするべきか。：：ああ、白川のおば様にはよろしくお伝えしてね？……最後に一色、あんまり調子に乗つてると——」

——いた一一しつペ返し、あるかもよ？

☆☆☆☆☆

栢は柄にもなく、三高の愛梨と腰巾着に強く圧力をかけた。
それはわざとであり、愛梨への牽制であつた。

愛梨は一高の二科生差別と同じように、魔法力でしか人をみれない、色眼鏡をかけて
いる。それは非魔法師や格下の魔法師との軋轢を既に産み始めていた。だから、これ以
上増長しないようにという牽制を打つたのだ。

これでダメなら、理事会にかけるしかないのである。

古式には古式の瑞宝理事会という十師族のような集いがあり、大まかに『神道系』『密

教系』『土着系』『口寄せ系』『日本神話系』『忍術系』『陰陽道系』そして『宮内系』の8系統に分けている。

例えば、九重八雲や藤林家は忍術系、吉田家は神道系と土着系と日本神話系を混ぜ合わせた異端児家系、矢車家は口寄せ系、沓子の四十九院家のルーツである白川家は神道系、などなどである。

宮内系は皇室に携わる古式魔法系で、数は少ないが権威がある。

7年に1度、全ての古式家系の当主から各系統1家ずつ理事を選出する。理事長は宮内系が務めるのは不文律ではなく、瑞宝理事会を設置したのが天皇であるからだ。

この場はかつては魔法の隠蔽についての話し合いと、議決を行っていた。違反者は理事家系全てを敵に回すという圧力団体である。

だが、魔法が明るみに出た後、伝統派を称して離脱した家系は少なくない。

現在は、古式各家系の発展と現代魔法を用いる魔法界の監視を担っている。

例えば魔法技能による差別に対する忠言や、不必要的流血の抑制、現代魔法による権威の低下を防いでいる。だが、1番の目的は十師族制度の監視だ。ナンバーズによる横暴によつて古式魔法師が被害を受けるのを防ぐことが最も重要視している。

御巫家は宮内系の理事にして理事長を務める家系なので、栂は理事会の理事長である。

☆☆☆☆☆

『——諸君、魔法力は絶対のものではない。魔法というツールを持つ諸君らは魔法力を磨くことも大事なことだが、それ以上に魔法の使い方について学んで欲しい。魔法を学ぶ若人諸君、私は諸君らの工夫を楽しみにしている。』

来賓挨拶の大トリ、九島烈。

十師族制度を確立した老師と呼ばれる魔法師だ。

「失礼、御巫家当主の御巫栄様ですね？」

「はい。」

「こちらのメッセージカードをお預かりしております。」

来賓挨拶を終えると、パーティはあとは自由参加という形になる。帰っていく者もいれば、まだ食べ足りない者もいるので自由としている。

栄は後者だが、前半はあまり食べれなかつたからだ。車椅子で人混みの中をスイスイ進めるほどの操作技術は持つていないので。

だが、そのメッセージカードは奇しくもご飯よりも優先すべき人物のものだった。

会場から出て、ホテルのエレベーターで最上階へ向かう。

ちなみに現代の車椅子は無線送電によつて駆動していく、バッテリーは無線送電圈外の時にのみ作動する仕組みになつていて、この富士演習場南東エリアは無線送電圏外であるが、このホテル内だけは無線送電で駆動・充電されている。最上階の一番奥（といつても部屋が大きいのでそこまで進まなくとも突き当たるのだが）に着くと、衛兵のように扉の前に立つ2人の男が栢を止める。

「ここから先は関係者以外立ち入り禁止です。生徒の方ですね？生徒は11階より下ですよ。」

「これを受け取つたの。通してもらえるかしら？」

栢は御巫家当主の顔でここに臨んでいる。

衛兵がカードを確認すると、失礼しましたと、道を譲り、ドアを開けた。

そのまままつすぐ進むと、ホテルのドアらしいドアが見え、インターホンがあつた。ボタンを押すと、何も言わずに鍵が開く。

「待つっていたよ、御巫栢くん。」

「お久しぶりね、栢ちゃん。」

「初めまして、九島烈閣下。ご無沙汰しております、藤林響子嬢。」

栄の口調に響子は少し顔を顰める。

「別に響子さんでもいいのよ？」

「いいえ、今の私はその立場にありません。今の私は十師族を監視する理事会の理事長であり、国を守る宮内系代表理事です。そして、貴女は忍術系名門家系藤林家の名代としてきてる訳ではなく、十師族九島烈閣下の孫娘としてここにいます。そう私は認識しています。」

老師は片手を上げて響子を遮る。

「良かろう。…まずは当主に就任したことに祝辞を送る。まあ、その建前は置いておいてだ。我々九島を初めとする九の家系が古式魔法を取り入れた現代魔法師だと言うのは知つておろう？」

「ええ。仮装行列なんかは良い例ですね。忍術系の得意とする幻影を現代魔法で再現したのはすごいと思います。」

「うむ、その中で――」

「まどろっこしい話はやめにしませんか？要は伝統派をどうにかしてくれつてことですよね？古式の中で。」

伝統派は、理事会に属さない古式魔法師の集団で、忍術系・密教系・土着系が多い。こ

れはかつて地下に潜つた汚れ仕事専門の古式魔法師たちの末裔と九の家系に裏切られたと思い込むほど間抜け共の集団だ。九重寺や土御門などから第九研に参加した人達は伝統派には所属していない。

「不可能と言わざるを得ませんね。仮にもこの日本は法治国家ですよ？表沙汰に出来ない犯罪しかしていらない彼らを捕縛することは——」

「いや、そうではない。我々九の家系と他の同調する古式魔法師家系で根絶やし・資料の焼却が決まっている。理事会の長にそれを報告するために今日は対談させてもら——」

——

「理事会として、それは断固として反対致します。」

ピクリと老師の眉が動く。

「仮に根絶やしにする場合、彼らの秘伝書などの回収は理事会として必須事項です。彼らの思想こそ歪んではいますが、古き繋がりを断ち切る行為です。そうなれば古式魔法の多様性が減ります。それを理事会は許容しない。それでもあなた方がそれを行うというならば、内戦もやむなし。」

「……仮に資料を回収したとして、それは誰の手に渡るのかね？我々は慈善をしたい訳では無い。」

「理事会加盟家系の中で最も近い系統の家に再分配することになるでしょう。あなた方

に対する補償の必要性はない。本来あなた方がするのは虐殺であり、魔法文化の多様性を保持するという国家の利益を損なう行為。宮内系代表理事としても受け入れ難い。」

「今、我々は内戦をする気は無い。君の提案を飲もう。」

「感謝します、九島閣下。」

栢は車椅子を反転させる。

「最後に、これは1人の爺として聞かせてくれ。君の足はどうしたのかね?」

「…そう言えども、地域の守護も十師族の仕事でしたね。関東は七草と十文字。この脚はブランシュに撃たれたショックで動かないらしいですよ。脳神経的に運動させられな

い状態です。」

暗に十師族の怠慢だと告げながらドアに向かう栢は、一度車椅子を止める。

「十師族制度は高い相互監視性を持つています。あなたが勢力調整をする程じゃない。四葉が強すぎる?あなたは何も見えていない。あなたが対立を煽つて勢力を伸ばさせた十師族各家系が強くなつたら釘を打つ?冗談も程々にした方がいいですよ?今伝統派ならともかく、表向きな戦力である四葉を削るのは下策です。アンタツチャブルの名前は有効活用すべきでしよう?」

今度こそ、栢はあっけに取られている2人を置いて、自分の部屋に帰つて行つた。

シスコン達也、小さい女の子なら誰でもいいの？

元来、達也の睡眠時間は短い。

なぜなら、体と脳が休めれば睡眠を終えて良いから。

九校戦初日の朝も早かつた。

だが、もっと早く起きていれば、もっと早く寝ていれば、あんな事にはならなかつた
と後悔することになるのは達也はまだ知らない。

☆☆☆☆☆

「うーん、お腹空いた。」

栢は閉まっているパーティ会場の前を通り過ぎながら、呟く。
あいにく、妖精たちにはしばしの休暇というバカンスを与えてるので、料理担当の
瑞葉もいない。

前に達也が深雪にご飯を作つてもらつていると聞いて、深雪の部屋に行くも、空。ホテルのカフェも既に営業を終了している。

とりあえず何かないか探すのに、一高の作業車の方へ向かう。

ちなみに、もう夜なので、サンシェードフィルムは剥がしてある。さつきまでの色んなことでの汗で通気性高いもののはずなのに気持ち悪いと感じていた。

「あれ？ 御巫さん？ どうしたの？」

作業車には五十里啓がいた。

「さつきのパーティでは何も食べられなかつたから。」

「そつか：あ、司波君の部屋にインスタントの食料があるよ。僕たち技術者が夜食にする分だけど、多めに持つてきるはずだから司波君に分けてもらうといいよ。」

「本当ですか、ありがとうございます。」

再びホテルに戻り、達也の部屋へ。

達也は荷物の管理も仕事で、2人部屋に1人で入つてゐる。ちなみに葉も1人で少し広い部屋を使つてゐるが、これは車椅子への配慮である。

チャイムを鳴らすと、達也が出てくる。

「葉か。どうした？」

「ご飯をちようだい？」

「…？ああ、パーティでは食べれなかつたのか。人も多かつたからな。」

そう言いながら、達也は外に出てきて昨今のホテルでは珍しくない幅広の外開き扉を支えながら中に迎え入れた。

「…！深雪たちもここだつたからいなかつたんだ。」

「ええ、お兄様が1人部屋だと聞いたから。」

深雪、ほのか、雪の3人は達也の部屋にある2つのベッドに腰掛けていた。

「それより、栄はどうしたの？」

「ご飯食べ損ねた。深雪も居ないし、作業車行つたら啓先輩からここに食料が備蓄してあるつて。」

「…出来たぞ。」

「「「早！」」」

「レトルトを温める訳でもない。お湯ならポツドに沸かしていた。フリーズドライにかけただけだ。」

達也は一通り揃つたトレーを机の上に置き、椅子を退かす。

「こつちの方が食べやすいだろ？」

「ありがとう、達也。」

小ぶりな丼に白いご飯がよそられていて、その上にはたまごと鶏肉と玉ねぎのパレード。味噌汁も具沢山豚汁で、漬物にはたくあんが厚めに2枚切られていた。（1人分でパッケージされたものを開けただけだが。）

「相変わらず日本のインスタント事業は凄まじい完成度だよね。正直、軍が未だにくそ不味いレーションを使う意味がわからない。旧海軍でさえ戦闘食糧は握り飯に牛缶にたくあんだつたのに。」

「栄、くそなんて女の子が言うセリフじゃないわよ？」

「ごめんね深雪、今の私はやぐされもーどだからさ。」

「そもそも、軍の施設で、そんなこと聞かれたらまずい。」

「あ、そう言えばここつて陸軍の施設だつたつけ。」

栄が食べ終わる頃には、達也は何か調べ物をしていた。

「達也、ごちそうさま。何調べてるの？」

「魔法師の交流掲示板なんだが、面白いものを見つけたんだ。『魔法師の同性婚への忌避感は実はただの迷信説』だそうだ。スレ主は魔法師同士の男性同士での同性婚をしたらしく、その中で人工子宮によつて子供を設けたらしい。その結果、まだ子供の段階だが

魔法力を発現しているらしい。」

「へえー。」

「さらに研究が進めば魔法力がどの遺伝子に基づいているかを見つければ、全ての人が魔法師となる未来も無いわけではない。……まあ、今のところ夢物語だが、確かにありうるかもしれない未来だな。遺伝子操作による才能の付与。さらに発展すれば親無しで子供を作れるかも知れんな。」

「そんな…」

「怖いかな、そうなると。」

「あ、こっちの女性の魔法師同性愛者的人は、人工全卵を自分のお腹で産むための準備をしているらしい。」

全卵というのは、精子同士・卵子同士での受精卵形成が可能になつたため、受精卵といふ言葉を言い換えた言葉で、現代日本では比較的浸透してはいる。

なお、技術的な難しさから、精子同士の方が成功率は低く値段も高い上に、母体が無いので、代理母もしくは人工子宮を用いる必要があるが、それもかなりの高額となる。「なるほど、なら魔法師に同性婚を認めるなら、国は同時に人工全卵形成と代理出産への経済的支援が必要になるからその迷信を公表にしてはいるってことだね。」

「魔法師だけに経済的支援を行えばまた人間主義の人たちがうるさいから。」

「零も零で容赦ない言い方だよね…」

昔と大きく変わった性別への観点ではあるが、それでも、男女が普通のカップルであることは確かである。

いくら同性でも子供が出来ても、色眼鏡で見られることは変わらない。

零は少しいつもよりもさらにジト目になりながら、とりあえず栞に視線を向けるのだった。

☆☆☆☆☆

(何故こうなつた。)

深雪たちが話に区切りが着いたところで帰ろうとした時、栞は食器を洗つてからと言つたので、深雪を部屋まで送つていくのもあつたので、達也はそれを受け入れた。

そこまでは良かつたのだ。

栞は何故かきちんと食器を洗つた後、わざわざ車椅子からベッドの上に移動していって、爆睡していた。

明日が休みとはいって、技術者である達也は1日働き詰めであるので、普段なら徹夜してでも寝ない場面だが、1番優先すべきは深雪が喜ぶことで、九校戦で勝たせてやることだ。そのために全力を發揮するためにはきちんと仕事をその日に終わらせておかなければ後が、深雪の調整にも響いてしまうかもしない。致し方ないと考えた達也はもう1つのベッドに横になり、深い眠り（深雪への眼はそのままだが）に就いた。

そして、朝、達也が起きてみれば、達也と栞が半裸でひとつベッドで寝ていた。咄嗟にベッドの表面を手で触ったのは男としての反射だろう。彼ならエイドスを遡ればナニをしていたかななど分かる事だ。

とはいって、それを思いつかず物理的に確認することが頭にあつた達也は自分のモノを触り、それではわからず、栞のソコを見ようと剥つていたブランケットを剥ごうとした時、ガチャという音と共にドアが開いた。

完全に頭がいっぱいだった達也はドアのノックが聞こえなかつたのと、深雪に鍵を預けていたことをすっかり忘れていたのだ。

「…お、お兄様？」

達也がはつ！と振り向くと、深雪が自らの二ブルヘイムで凍りついた氷像のように固

111 シスコン達也、小さい女の子なら誰でもいいの？

まつ
て
い
た。
。

栄がとにかく屋台を楽しむ話

なかなか刺激的な朝を迎える、達也は深雪のご機嫌取りと弁明に必死になつた次の日。

2095年度全国魔法科高校親善魔法競技大会は開会した。

九校戦の放送は魔法が可視化された特別なカメラで撮影しているが、会場で見に来ている人で魔法感受性が乏しい場合、専用の双眼鏡のような機器を通して見ることが出来る。だが、普通の魔法師の場合は感受性が乏しいことは無い（なければ自分が魔法を使う感覚が分からぬからと考えられている）ので非魔法師である人が使うことが多い。（たまに魔法師でも見る方が楽しいという人もいるが。）

とはいって、非魔法師が九校戦を見に来ることは少なく、せいぜいが屋台の人などだらう。

雲やほのかたちが一高の先輩達を見に行つてゐるのを放つておいて、栄は屋台の人堪能

していた。

「おじさん、ケバブ1つ。ヨーグルトソースね。」

「あいよ！」

「お姉さん、会場限定フレーバーってどれ？」

「いらっしゃいませ、こちらのプチプチミントチョコプラスとトッピングの焼きマシユ

マロが今回の限定商品です。」

「じゃあ、それとラズベリーチーズケーキフレーバーとフレークトッピングで。」

「ありがとうございます。」

「すみません、焼き鳥：ももタレ2本とほんじり塩2本で。」

「はいよ！480円でい！」

「マネーカードで。」

「あ、このCAD、松本工業さんのですか？」

「そうですよ。春発売したものと同型んですけど九校戦デザインが発売されてるんですよ。ちなみに処理速度制限を付けければ稼働時間が伸びると共に、ほとんどの魔法競技のレギュレーションに合致するんですよ。」

「…クロック速度はいかほどでしたつけ？」

「これくらいですね。」

「1台ください。」

「金だこ！16個入り1つくださいな！」

「1200円です。」

「このお面、かわいい！」

「カレー1皿！」

「冷やしパイナップル！1つください！」

「あ、さつきのおじさん！ケバブ今度は中辛ソースで！」

「あ、わたあめ！1つください！」

「かき氷！いちご味1つ！」

「……浴衣でも持つてくれば良かつたかも。」

栢が屋台を楽しんで、一高のテント（と言つても冷房は付いている）にまだ食べ終わつていない戦利品を膝の上に置いて、わたあめを左手に持ちながらテントに入ると、上級生の何人かからぎよつとした目で見られた。

「あら？ 栗さん、お昼かしら？」

「いえ、おやつです。これから焼きそばと広島風お好み焼きとイカ焼きと、全部制覇してきます。」

(なんで栗さんってこんなに食べるのに瘦せてるのかしら?)

真由美はお昼休憩にテントに戻つたら、九校戦そっちのけで屋台を楽しんでる梨に声をかけたが、その応答にツッコミよりも先に体型を考えてしまう少女らしい発想をしていた。

「楽しそうでなによりよ。」

「会長こそ、絶好調みたいですね？会長が出る予定の時間の直前はスピード・シューティングの会場の方にあつた焼き鳥屋さんすごい混んでましたもの。」

「あははは…基準はそこなのね。」

真由美はスピード・シューティングのユニフォームの上から羽織つていたパーカーのポケットから1枚のカードを取り出した。

「梨さん、お好み焼きと焼きそば行くのよね？私の分も頼めるかしら？」

「いいですよ？何人前ですか？」

「……1人前ずつで大丈夫よ。」

「??」

「あ、いや2人前ずつお願ひ。」

「ですよね。」

（絶対私が2人前ずつ食べると思つてるわね…鈴ちゃんの分も頼んだだけだけど…まあいいか。）

栢はマネーカードを制服の裏ポケットに入れて、車椅子を走らせ始めた。

なお、一高テントに戻ってきた時はまあまああつた膝の上の食料はほとんど胃の中に消えていた。

お好み焼き屋さんへ向かう、途中に唐揚げを買って、わざわざカスタマイズで左手のアームレストに取り付けたジユースホルダーに置いて、食べながら車椅子を走らせていた。

「お好み焼き4つください！」

「あいよ！5分待つてくれ！」

「2つはこつちのマネーカードで、残りはこつちのマネーカードで支払いお願いします。」

「あいよ！出来たら取つとくから回つても大丈夫だよ！」

「分かりました、じゃあお願ひします。」

「すみません！焼きそば5つ！3つは紅しそうが多めで！会計は紅しそうが多めと普通で分けてお願ひします！」

「よつしや、ちよつと待つてろ？……ほれ。」

「ありがとう！」

「おう、車椅子の娘ちゃん！そこに袋に入れといたぜ！持つてきな！」

「ありがとう！」

「なんだ、いっぱいだな。これ使え。」

葉は貰ったダンボールの箱（今でもダンボールは輸送によく使われる。紙資源なのでリサイクルが発達している。）に戦利品を詰め込んで膝の上に載せる。

（お、いい感じ。）

安定感の増した戦利品にニヤニヤしながら左足でとあるスイッチを押す。

そして、開放された2段階目の方向レバーを前に押し倒す。

すると、車椅子の速度は時速 6 km/h から一気に 25 km/h に加速する。

葉はその速度でも慌てずに歩行者を避ける。（細かい制御はまだ苦手なので大回りで。）

御巫家の分家によつて魔改造されたこの電動車椅子は、2段階のリミッターが付いていて、2段階目を解放すると左手のアームレストにアクセルレバーがせり出してきて加速と操舵が別系統に分かれる。最大速度はバッテリーの消費を度外視すれば 140 km/h にもなるが、クラッシュしたら葉が再起不能になる可能性が高いため使つてみたこともない。

まだ1段階目の解放であるため、 25 km/h までしか出ないが、それでも速い。

そのままリミッターを戻して、通常の前進に変えて惰性で一高テントに突っ込む。
そして、方向レバーを中立に戻して、真由美の前にドサツとダンボールを置いた。

「買つてきましたよ。ご一緒してもいいですか？」

「ええ。それにしても速かつたわね。」

「お好み焼きのおやつさんがダンボールくれたので、無茶な速度でも走つてこれました。」

「そ、そう。」

なお、お好み焼きと焼きそばにがつつく葉を隣で見ていて胸焼けがして、午後の競技でいつもより魔法の正確性が低くなつたことは、真由美のちょっとした内緒話である。

妨害の舳先

一高には三巨頭と呼ばれる3人の実力者がいる。

遠隔精密魔法に秀でた七草真由美、干渉力と障壁魔法に秀でた十文字克人、そして魔法剣術を含めた技と器用さに秀でた渡辺摩利。

前者2人は十師族として有名な家系の子息であるが、摩利は百家傍流もいいところだ。だが、その力は先祖の渡辺綱のような先祖返りでもあつたのかとても高い実力を持っている。

ただし、それは逆に大きな後ろ盾がないことも確かである。せいぜいが千葉家と近接戦闘で世界で五指に入ると言われる千葉の麒麟児千葉修次くらいだ。

だからこそ、妨害では真っ先に狙われてしまつたのだった。

☆☆☆☆☆

「命に別状はありません。しかし……1週間は絶対安静です。ミラージに出ることは聞いてますが、ゆめゆめ出させないように。」

医師はそれだけ言うと帰つてよろしいといい、診察室から追い出した。
付き添いで行つていた真由美と克人は頭を抱える。

「他の競技の現状を見る限り、ミラージは外せないわ。」

「だがどうする？」

「すまん、2人とも。不甲斐ない限りだ。」

「気にするな。お前が魔法技能を失つていなることに安堵しているくらいだ。」

「そうね……事故にしても妨害にしても結局手が混みすぎよね。」

「まあその分析は後でにしよう。」

三巨頭はそのまま一高テントに戻る。

「……しかすれば、代役を立てるほかないだろう。」

「だがミラージの補欠はいないぞ？」

「……いえ、いるわ。新人戦出場者で、摩利に圧勝した子が……！」

「御巫か！」

「なるほど、確かに彼女なら：ルール的にも、新人戦枠でエントリーしても1種目を新人戦で出場する場合は本戦枠にエントリーする必要は無い：か。」

「ただ、その代わりに新人戦ミラージュは1人減るぞ？」

「その分はサポートメンバーからエントリーすればいいわ。鈴ちゃん、サポートメンバーでミラージュの練習に参加してた人は？」

「いません。」

「え？」「……」

「ミラージュは花形競技ではありますが、跳躍を15分ピリオドで3回休憩5分で実践レベルにある生徒は：残念ながら。」

「そう…とりあえずデータにない子探してみるわ。やけくそだけど。」

真由美はとある3人を呼んでくるようにテントに詰めていた作戦スタッフに頼んだ。

☆☆☆☆☆

「…という訳で、栢さん。本戦ミラージュ・バットに摩利の代わりに出場してもらえるかしら？」

「それは大丈夫です。」

「じゃあこの件はとりあえず終わりね。」

そこで話しかけたのは、栢と共に呼ばれた1人である深雪だ。

「あの…私たちはなぜ呼ばれたのでしょうか？」

「むしろこっちが本題よ。栢さん、深雪さん、達也くん、3人に新人戦ミラージ・バットの空席を埋められるメンバーは知らないかしら？」

「…すみません、私は会長以上のこととは分からないかと。」

同じ生徒会役員である深雪はそうそうに白旗を揚げる。

「…男子もありなら古式魔法使いの吉田幹比古を推薦したところですが、自分の知り合いなら千葉エリカくらいですね。しかし、彼女を使うくらいなら跳躍が実践レベル出なくとも一科生を使う方が高順位は狙えるかと。」

「…………ふふふ。」

栢は達也の言葉に幹比古がぴっちりとしたミラージ・バットの一般的な衣装を着て飛んでいる姿を想像してプルプル震えていた。

特に栢が直接会ったのは神童と言われていた頃の天狗の鼻だった幹比古があるので、さらに滑稽だった。

「…ふ…はあ、治まつた。なら私は1—Eの柴田美月を推薦します。」

「「な!」」「…」「ほう。」

「彼女は私と同じ妖精を使役している可能性が高い。彼女の妖精が空間系能力なら私と同じように飛びっぱなしということも不可能ではないです。」

「……美月はこのホテルに宿泊しています。直ぐに呼んできましょう。」

「最悪に備えて私も妖精を招集しておきます。」

葵は裏ポケットから取り出した1枚の笹をC A Dの補助なしに精霊を喚起して燃やした。

「精霊魔法まで使えるのか。」

「もちろん。精霊と妖精の違いは現実に実体を持つか持たないかの差以外は大きくないんだよ。」

「ほう……」

☆☆☆☆☆

「高テントに集合した妖精たちで美月を取り囮む。」

「ハル、攻撃があつた時は威力を調節して反射して。」

「了解よ。」

「美月、あなたが妖精を使役していることは知っている。妖精魔法の主家の当主として

あなたがこの国に不利益を与える妖精遣いだとするならば、私があなたを消すわ。」

「え？ ちよ、何の話ですか！？」

「しらばっくれても無駄よ。高位の妖精遣いは他者の妖精との契約の繋がりが見えるの。」

「…紗奈、もういいですよ。」

「いいの？」

「出てきて。」

美月の胸の谷間に姿を隠して（妖精ってほのかの時もそうだけど、きっと巨乳好きが多いんじゃないかな？）いたのをやめて1人の妖精が出てきた。

「ブランシュ襲撃の時にたまたま私を守ってくれた時に契約した子なんです。別にこの子を使つてどうこうしたいっていうのはないです。」

「…もしかしてその子、強化系？」

「え？ まあ本人の戦闘力も無いわけじゃないんですけど…」
ニヤリと笑つた栞は合図を出す。

「会長、イケます。」

「本当？」
その言葉に物陰に潜んでいた一高幹部人員と司波兄妹が姿を現した。

「強化系妖精がバツクアップについてれば長時間の反復魔法使用にも耐えるでしょう。」「え？ え？ ……え？」

「じゃあ…生徒会長、七草真由美として、我が校の生徒である柴田美月さんを新人戦ミラージ・バットの補欠として新人戦枠エントリー及びミラージ出場を打診します。」

「え？ え？」

美月はその意味を、そしてこの栄による尋問の意味を理解するに従つて困惑から驚愕に表情を変化させていった。

「ええええええええええ——！？」

新人戦開始。

スピード・シユーティングから始まる新人戦初日。

予選は特化型CAD一つで妖精のアシストなしに栄は戦うつもりだ。
「本当にこれでいいのか？」

「問題ないよ？」

「……そうか。」

担当のエンジニアである達也が疑問を呈するほどのピーキーなCADを調整していった。

特化型のレギュレーションを通る処理速度を起動式ストレージのあまり容量も処理速度に割り振つて高速さを目指したCAD。

某世界では『ビームサーベル』や『ライトセーバー』や『光剣』などと称される物の柄の部分みたいな筒状のCADだ。

そして、その表現は正解だ。

「…振動単一系魔法『ビームサーベル』…………本当に使う人がいるとは思わなかつた。」

人々、インデックスと呼ばれる国立魔法大学の編纂する魔法大全に記載されている魔

法の中で最も厨二臭いと言われる魔法だ。

高出力のレーザーを魔法でさらに強化するというピーキー仕様で、特に特化型であるにもかかわらず照準補助をレーザーを照準できるようにしている。無駄が多い方法の魔法であるにも関わらず、インデックスに追加され削除されないのは単に口マンだと噂になっている。

ちなみに、光剣という魔法もあるが、それの方が本来のSFの剣に近い。

そちらは、予め指定した同形状のCADの先の空間に放出系魔法を掛けて空気をプラズマ化させた熱で物体を切る。

「まあね。さ、調整終わつたら他の子の所に行つて。私は予選くらいで負けないから大丈夫。古式魔法も使わずに勝てると思える程ね。」

「…分かった。これで大丈夫なはずだ。試して見てくれ。」

葉はCADにサイオンを流し込んで起動式を取り込む。だいたいの魔法師はここでCADの調整のの善し悪しが分かる。とはいっても、達也だ。ソフト面は完璧と言える。

「うん、完璧。」

「一応競技用で言われてたとおりアジャスター幅——いわゆるゆとりは極端に狭くしてある分レスポンスはいいと思うけど、外れたら一気にパフォーマンスは落ちるから体調・精神共に整えといてくれ。言うまでもないと思うが。」

「ありがと。決勝トーナメント用のCADも用意出来てる?」

「ああ。起動式も栄の用意したものアレンジしてあるが…あっちの方がピーキーだな。」

「まあね。」

「そもそもなんであれが使えるのかは疑問だが…まあそれは置いておく。俺はエイミイの方に行つてくる。」

「いってらっしゃい。」

達也はピーキーな魔法選択に引き気味になりつつ、この間のことが頭に離れないで若干ソワソワしながら出ていった。

それが意味することをまだ達也は知らない。

そう、達也が栄を見る眼が深雪に向ける眼と同じ色をしていることはまだ達也自身も知らない。

☆☆☆☆☆

『新人戦1日目の午前の部が終わりました!新人戦は事前情報の少なさがまた面白いところではありますが、解説に来ていただいたA級魔法師にして東北広域行政区警察機動

隊の竹中さんと午前中を振り返つて解説してまいります。竹中さん、よろしくお願ひします。』

『よろしくお願ひします。』

栄を初めとして1年女子メンバー十達也等は有線の九校戦を中継する番組を一高テントで見ていた。

『午前中に行われた競技はスピード・シューティング予選とバトルボード予選の半分弱ですが、まずはバトルボード予選、これまで特に注目すべき選手はいますか？』

『そうですね…まずは第一高校の光井ほのか選手ですね。最初の強烈な光学系魔法での水面干渉からのスタートダッシュは目を見張る速さがありました。これまで光学系魔法での妨害でのスタートダッシュを成功させている人は実業団含めていませんでしたから、彼女は卒業後各実業団から引っ張りだこになりそうです。しかしながら、逆を返すと対応されやすい妨害でありますので、そこを次どう出し抜くのが大事になります。あとは午後に出てくる三高の事前情報組の1人である四十九院杏子選手のプレーで大分わかると思いますよ。』

テレビの評価にほのかは少し怒る。

「達也さんが考えてないわけないじやない！」

「そうだね。』

『なるほど。』

『男子の方はやはり海の七高が強いです。魔法力自体は恐らく一高や三高や二高の方が優秀なんでしょうが、それ以外の項目で差をつけられますね。機動隊員の立場からさせてもらうと、魔法力だけあっても身体的に強い人間でなければ実戦では役に立ちませんし、ここぞの踏ん張りも足りません。今年の1年男子は現実を知らな過ぎるようですね。特に一高では魔法力によつて学科が分けられていますが、その間で差別がまかり通つているとか。一高の評価基準である国際基準では測れない力がこの七高新人戦男子のバトルボード躍進を支えていると思います。』

この放送を少し遠くから見ていてる真由美と摩利は少し顔を歪ませる。

「いい加減にしなければいかんな。」

「そうね…竹中さんは十師族に反対する勢力である陸軍の派閥と近い関係だからある程度の大袈裟な攻撃を覚悟してたけど…正論よ。全くのね。」

どうやら竹中は反十師族ではあるもののこの国の将来を憂う人格者の1人であるようだ。

『スピード・シューイングはどうでしようか？』

『面白かったという意味では、一高女子の御巫栄選手でしょう。まさか日本中の魔法研究者がロマンでインデックス登録を削除しなかつたチームサーベルを使つたというこ

とで、同僚とのメールチャットでも『伝家の宝刀抜かれる』とか『エクスカリバーを抜いた少女』とか話題になつてますよ。』

『イギリス大使館のホームページでも『日本のサムライもレーザーソードの時代に』と紹介してますね。』

『そうですね。かなり他の魔法で代用可能な魔法なだけに意外でした。特に高速で飛び交うクレーをバツタバツタと切り伏せる姿は私も目を疑いました。必ず一振で1つ叩き落としてました。先程審判委員に見せて頂きましたが、見事な断面でした。この時点できなりの高火力だつたことが分かります。御巫家は古くからある古式魔法の大家で、その象徴とも言える妖精の姿も今大会で見れると嬉しいと思います。』

『ちなみに男子は――』

『本命が三高のカーディナルジョージこと吉祥寺真紅郎選手、大穴で一高のクイツカ―森崎駿選手ですね。どちらも地はいいのに、あまり派手さがない上に美少女・美少年つて訳でもないので玄人好みの試合展開になりそうです。』

『確かに、顔かたちは整っていますが、周りと比べてしまふと花がないですね：魔法師は左右対称になりやすい傾向がありますから、いわゆる美人が多くなります。芸能界などでも活躍する魔法師の方はいますからね。』

新人戦2日目

『さて、おはようございます。全国魔法科高校親善魔法競技大会、通称九校戦ですが、今日で5日目となりました。本日行われる競技は新人戦のアイス・ピラーズ・ブレイクとクラウド・ボールであります。本日の実況は私、森安智成が。解説は国防海軍、特殊魔法師部隊司令を務める坂本徹大佐にお越しいただいております。』

『坂本です、よろしくお願ひします。』

雲は自室でテレビをつけながら、最後の調整をしていた。

「響、準備は？」

「もち。」

「まあ、これで万全じゃないとか言つたらさすがに工口関連全部禁止つて言うところだね。あんな夜中までお盛んだつたもんね。」

「……いつでもどこでも準備万端つてことだね。」

「……響が言うと別な意味に聞こえるから。」

「もちろん、あっちの意味に聞こえる。」

『昨日の新人戦初日、凄かつたですねえ。』

『ええ。私も見てました、が、今年の1年：特に女子はレベルが高い。さらに男子にも一条の御曹司やカーディナルジョージなど見ものですね。』

『昨日、結果の出たスピード・シューティングを振り返りましょう。まずは男子ですが、やはり第一高校と第三高校の一騎打ちとなりましたね。』

『ええ。ボディーガード業やCADの操作技術で有名な森崎家の一人息子と先程も挙げたカーディナルジョージ。カーディナルジョージのインビジブル・ブリットはスピード・シューティングには圧倒的に有利でした。それをあそこまで食い下がるとは：とてもいい試合でした。』

『対して女子ですが、優勝した第一高校の御巫栢選手には驚かされました。』

『はい。予選はなんとビームサーベルでしたからね。決勝トーナメントでは十七夜栢さんの代名詞と言われる数学的連鎖アリスマティック・チェインを使って驚かされました。アリスマティック・チエイン同士、栢同士の戦いも準決勝で見られ、双方のキャパシティと空間演算力の大きさを見せつけられました。』

『十七夜栢選手との準決勝ですが、十七夜選手は後半苦しい立ち回りになりました。』

『そうですね。自分だけの持ち技と認識していた切り札を使えた相手との戦いで、相手の方が上手く使っていたようですから、非常にショックだったのではないかと思われます。』

零はテレビを消した。

「響、栢は勝つた。私達も、勝とう。勝つて栢と…絶対に謝りに行く。」

あれから1ヶ月ほど経つが、零と栢はつかず離れずを行つていた。また前みたいに…いや、もっと踏み込んだ関係になりたいと、零は思い、今回の競技に挑んでいる。

昨日のバトル・ボードにも出場したが、そちらは目立たない程度に予選を突破している。

「…僕の魔法なら、深雪にだつて負けないよ。」

零の魔法資質と響の魔法資質が近いため、響が契約した時にその能力が拡張されてい

る。

「そうだね。…そう言えば私つて今、古式魔法師なんだ。」

こういう時にふと気づくのが零クオリティ。



アイス・ピラーズ・ブレイクの予選は、各校3名（前年度下位3校は2名）をそれぞれ別の3つのブロックに振り分ける。

そのため、深雪と零が当たるには予選トーナメントの突破は必須である。今日の2試合を行い、各予選リーグは2名の予選決勝進出者を出した時点で次の日に持ち越しとなるが、これは製氷能力の限界である。

ただでさえ暑い夏にバカでかい氷を1試合24本製氷しなければならず、これが限界である。

予選ブロック1つにつき、1回戦4試合、2回戦2試合。それが3ブロック。男女別なので×2。1日で、 $(4+2) \times 3 \times 2 = 36$ 試合。

$36 + 24 = 86$ 4本。それが今日作られるバカでかい氷の数である。

ちなみに明日は、予選トーナメント決勝の3試合と決勝リーグの3試合しかやらないので、男女合わせて12試合。 $24 \times 12 = 288$ 本で済む。

いや、それでも多いのだが。デカイ分。

製氷に差があるのは問題になるため、製氷は専用の機械で行われる。その後、審判委員のA級またはB級魔法師による何らかの保存魔法で開始前まで融解を防ぐ。

零は手札を見せずに深雪に当たるため、共振破壊と情報強化の2つだけで2戦を12

—〇と完封した。

対して、クラウド・ボールはスバルを除いてあまりいい結果を残せず、男子に至ってはなんとか来年の出場枠確保が出来たことは僥倖とさえ言われるような無様な試合であつた。まあくじ運も無かつたのも原因だが。

『解説の坂本大佐、本日の競技を振り返つていかがでしたでしょうか？』

『そうですね：クラウド・ボール女子、決勝は面白かつたですね。第一高校の里美スバルさんのパツシブスキルと第三高校の一色愛梨さんのエクレール。中盤は里美さんが押していましたが、終盤になつて速度を増した一色さんが押し切りましたね。魔法は気も大事になりますから、気持ちや気迫や元気とか。それで勝つたのでしょうか。』

『男子はどうでしたか？』

『そうですね：正直に言つて凡戦ですね。普通は凡戦と言うと玄人好みな駆け引きや水面下の戦いが多いのですが、それも少なく、本物の凡戦と言わざるを得ません。』

『それほど…ですか？』

『ええ。魔法には工夫の欠片も見られなかつたように感じます。あれで努力して工夫したと言える魔法師は私の部下にはしたくないです。厳しいこと言いますけど。』

『そ、そうですか…ところで、アイス・ピラーズ・ブレイクはどうでしたか?』

『男子の一条将輝は圧倒的でしたね。やはり一条家の『爆裂』は強烈でしたね。私でも同じ競技で勝てる気がしません。幸いにして彼の照準は爆裂で1つのようですから、自陣12本を倒されきる前にエリア魔法で一網打尽にするしか方法はないですね。それも彼の防御の上から。』

『坂本大佐でも難しいのですか?』

『この競技のルールでは難しいですね。素直に称えたいと思います。』

『対して女子はどうでしよう?』

『全予選グループの決勝に第一高校が上がってきたのは驚きました。予選Aグループの司波深雪さんの魔法力には驚かされました。同年代最高クラスの魔法力をお持ちのようですね。さらに、予選Bグループではバトル・ボードではギリギリ予選通過した北山零さんが共振破壊という強力な武器を手に暴れ回りました。予選Cグループでは砲撃魔法メインの明智英美さんが押し切りました。正直な話、今年の1年生女子は化け物揃いですね。得意魔法に限れば十師族と渡り合える力を持つてゐるのではないかでしようか?』

零は余裕すら浮かべながら、テレビを消してベッドに後ろから倒れ込む。

「共振破壊くらい…騒がないで欲しい…まあ、その分切り札には目が向かないからいい…か。」

机の上で、響自身が魔法で加工したらしいプラスチック製のナニでシてる声と光景から意識を逸らしつつ、零は明日に備えて眠りの森へ誘われていった。

そう、明日はバトル・ボードとアイス・ピラーズ・ブレイク、両方に出場するのだ。大忙しだある。

バトル・ボード 準決勝

(…………棒倒しは予選突破したね…………)

九校戦6日目。新人戦3日目。

午前中の試合が終わつた。

栢は少しほつとしつつ、車椅子を会場から外へ向ける。

「……楓、お使い頼めるかしら？」

栢は普段ならお使いを頼む時は紗彩に頼むが、今回は楓を起用した。

「私はうんなどよ。……はつ、べ、別に栢の近くにいたいとかそういう意味で聞いてるわけじゃないんだから！」

楓は色んな意味で末期である。

「この九校戦、良くないものがいるの。本当なら雷電を使いたいところなんだけど、ほのかにこれを伝えるわけにはいかない。風に流れて行けばいいわ。」

風の妖精である楓は、その名の通り風になることが出来る。紗彩よりも隠密性は高く、魔法的に侵入不可能な場所にも侵入可能である。その代わり、明らかに自然から離れた風を作ると魔法的に感知されてしまうので、 $1 \sim 2 \text{ m/s}$ が普通である。台風の時

なんかはもつと速く出来るが。

あえて妖精にしか聞こえない声で話す。

「お願ひつて言うのは

〔え?〕

雪は大忙しで服を着替えていた。

朝イチでアイス・ピラーズ・ブレイクの予選決勝。それが終わって、これからバトル・ボードの準決勝。

本当なら振袖にするつもりだったが、時間の都合上洋服にせざるを得なかつた。予選決勝はインフォーマルのドレスコードに着ていく（こんなでも、零は一応大企業社長の令嬢である）ドレスの1着を着て出場した。邪魔にならない程度の可愛らしく何層も黄緑系統の色のレースで飾られたそのドレスはお気に入りのひとつだ。

決勝、特に栄に見せるため、深雪を相手にする時のための特別なドレスも持つてきて

いたが、それは後で。

直ぐにドレスを脱ぎ捨てて、一度すっぽんぽんになると、いわゆるスク水と呼ばれるタイプの水着を着てからその上にウェットスーツを着る。

「あ、北山さん、CADの調整何とか終わりましたよ。」

あずさがひよっこり控え室に入つてくる。同性の技術者はこういう所に気を使わなくて済むので、一般的に九校戦では同性の技術者が当たられることが多い。

「ありがとうございます。」

バトル・ボードの準決の相手は三高の四十九院杏子。古式魔法家系の1つ、白川家の血も入つてゐる古式・現代両用する魔法師である。ちなみにもう1人はかの海の七高である。

(正直な話、バトル・ボードはここまで上がれれば学校への義は果たした。申し訳ないけど、手は抜かせてもらう。両方の決勝を抱えるのはキツい。)

零は少しここではたと、止まる。

(……もしここで勝てば、決勝はきっとほのかと……ここで同じ学校だからという理由で棄権すればいい。切り札1つ使つてしまおう。棄ならここで引かない。絶対に押しきる。)

零はカバンの中で寝ている規格外を使うことに決めた。

☆☆☆☆☆

『On your mark. Set……』

バトル・ボード準決勝第2試合。その時が始まる。

〔涙花、水面干渉は私たちの以外全部消して。〕

「うん、りよーかいつ！」

観客席には多数の研究者たちや応援の生徒、他校の生徒、一般客がいて、満員御礼立ち見多しである。

カーレースのような信号式のスタート表示と音が今、スタートを告げた。

〔響、よろしく。〕

防御を涙花、妨害を響、そして自分は走ることだけに集中する。

妖精遣いの高い利点は、妖精遣い本人の魔法として妖精の魔法が使われるため、相克が起こらない点だ。

「もーまんたいだよ。」

一新して綺麗になつた前方の水域の表面をを響の魔法で凍らす。その上を振動系魔法を使いながら進む。ボードと氷の間を震わせることで接地時間を減らして更なる速度向上を狙つてゐる。

ついでに氷を割りながら進るので、後ろには氷の浮いた水面で進みづらくなつてゐる。

あくまで水面への干渉なので別にルール違反ではないし、故意のショートカットもしていいので問題ない。やれる人間がいなかつただけで。

〔魔法の消去、残り半分きつたよ。〕

〔涙花、お疲れ様。正面の大きい魔法だけ消して。ほかは私が。〕

〔はーい。〕

(ん、水面に干渉できるようになつた…？やはり無理しておつたのか。儂の時代じゃ！) 息を吹き返した四十九院杏子が猛追する。ちなみに、七高は地味に四十九院杏子を風除けに追従する。

(まだ…落ち着いて。このままならゴール手前で追いつかれる。その時に…取つておき食らわせる…!)

少しづつ縮まる差に盛り上がる観客。一高の生徒の懇願するような瞳が目に入る。

〔…最後のカーブ。ここでいく！〕

「分かったよ。」

カーブに差し掛かる。

雪の少し外側を四十九院杏子が走行する。七高は途中で杏子が蹴落とした。（水没させた）

氷は自分の取るコースのみにしか展開していないので、すぐ横に着いた四十九院杏子には効果がない。

「涙花！」

妖精遣いの言葉ではなく、物理的に鋭く発すると、対魔法戦を行つていた涙花が無効化を辞めて雪をアシストした。

ドンッ！という音とともに、飛び出した雪。

「響！」

さらに響の魔法で雪自身のボードの少し下にとある魔法を撃つた。

今まで凍させていた氷の熱量を解き放つたのだ。

ライデンフロスト効果が起こり、ボードに付着する氷と少し陥没した水面の間の純粹な熱量に隙間が生まれ、氷よりもさらに摩擦が減り、振り切つてゴールした。

四十九院杏子はまだカーブの終わりの当たりにいた。突如感じた熱に思わず足を止めてしまっていた。

これを持つて、新人戦バトル・ボードの決勝進出を第一高校で独占したのだった。

零と栄の：

『こんにちは。現在、2095年度全国魔法科高校親善魔法競技大会6日目のお昼休憩の時間となっております。新人戦初日と同じく、解説に来ていただいたA級魔法師にして東北広域行政区警察機動隊の竹中さんと午前中を振り返って解説してまいります。どうぞよろしくお願ひします。』

『はい、よろしくお願ひします。』

『今日は新人戦のバトル・ボード準決勝・決勝とアイス・ピラーズ・ブレイクの予選トーナメント決勝と決勝リーグが予定されておりましたが：一高の快進撃からの歴史的快挙となりました。』

『そうですね。一昨日も話しましたが、一高と三高の男女間実力差や工夫差が激しいですね。特に一高は顕著です。森崎選手くらいしか新人戦で活躍している男子はいませんし、各試合のVTRを見ても工夫も薄いと感じますね。』

『まずはバトル・ボードです。女子は決勝進出が光井ほのか選手と北山零選手でした。

どちらも一高選手です。男子は七高と三高の一騎打ちとなりました。』

『光井ほのか選手はトリッキーなプレイスタイルでしたが、とても工夫に富んでいたのでは無いでしょうか？前の試合のイメージを利用した作戦など、とても素晴らしいものでした。北山雲選手は準決勝のパワープレーは見物でしたね。それにも…妖精遣いがとても多いですね。一高の1年女子だけで既に御巫葉選手と北山雲選手の2人が分かっています。しかも、どうやら2人とも2人以上の妖精を使役しているようですから、妖精遣いの中でも一流と言えます。』

アイス・ピラーズ・ブレイク新人戦女子の決勝リーグ控え室に写るテレビ（3Dプロジエクターである）を雲はほのかと見ていた。

「はわあー！私たちの事だよ！その作戦は達也さんが考えてくれたんだーっ。」

身体中からキラキラが溢れるように見えるはしゃぎ様に、雲も少し引く。

「…でも、良かつたの？」

「うん。」

『――この結果をもつて、新人戦バトル・ボード女子決勝戦は不戦同率優勝とすることになりました。』

「だつて、私のためにも頑張ってくれたんでしょ？」

ほのかは少し嬉しそうに、でも寂しそうに微笑んだ。その微笑みはどこか胸を痛める

様な、そんな感覚を零に与えていた。



『大変長らくお待たせ致しました。新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク女子決勝リーグ、優勝決定戦を行います。北側、第一高校、司波深雪選手。南側、北山零選手。』

会場のアナウンスが選手の紹介をすると共に、リフトが上昇して櫓に2人の姿が現れる。

〔涙花、響、2人とも作戦通りいくよ。〕

「もちろんだよ。あの美しすぎる身体に教えこんであげるよ。」

「そうだねっ！任せてっ！」

「もう何も言わない…と言ふか言いたくない。」

ブザーチと共に、零と深雪の魔法が閃く。

零の全力の共振破壊に、深雪は少しだけ驚く。感覚的にギリギリ干渉力で勝った感覚で、魔法の兆候に気づいて領域干渉に割く干渉力を増やしたのは深雪にとつて正解では

あつた。

とは言え、それでもインフェルノを今までより強度の低いものとはいえ発動させて攻撃できる時点で雪と深雪の間にある魔法力差は歴然としていることは分かる。

「涙花！」

「がつてん！」

そこを魔法の無効化得意とする涙花によつてインフェルノの定義破綻：加熱場所（熱量の移動先エリア）の全体に、涙花の固有技能にして四十九院杏子の水面干渉のほとんどを防いだ『魔法の不活性』を行つた結果、インフェルノは加熱エリアの喪失に伴い定義破綻によつて効力を失う。

魔法とは何か。

答えるとするならばそれはサイオンの流れによつて出来る偽の世界情報と言える。より簡単に言えば、サイオンという物が世界の形を隠して変化させていると言える。

魔法師は、保有するサイオンを情報式へ編集して、情報世界一つまりエイドスに送り上書きすることが出来る人物のことだ。

そして、涙花の特性は『遮断』つまり、サイオンの流れを遮断することによつて、意味を持つた魔法式を消し去つていたのだ。

(次はこつちつ!)

バトルボードの決勝を無くしたおかげでできた時間によつて着替えたその振袖の袖口に隠してあつた特化型CADを向けて、フォノンメーヴーを撃つ。

とても太く成長した熱線はそのまま深雪の陣地の縦1列を貫通した。

9—12

今までリードを許したことの無い：否、1本も倒されなかつた深雪側の氷柱がまとめて3本が破壊判定とされる火力は、観客席にいた達也を含む一高1年生陣に驚きを以て迎えられる。

「…ツ」

慌てずに深雪は砲撃体勢に移る。無理をして氷柱1本を飛ばしたエイミイ。それに対して防御魔法の領域干渉とインフェルノをかけつつ、半壊した氷柱3本を飛ばしに行くのは異常とも言える魔法力の強さを示している。

「涙花、インフェルノだけ消して」

「承知！」

「響！」

「いつでもいいよ」

妖精と妖精遣いの間の相性が非常に良い場合にのみ可能なブースト技：『憑依』。現代風に言うならば、妖精遣い自らの魔法演算領域と妖精の魔法演算領域の掛け合わせ：マルチブリケイティブ・キャスト法が最も近い。

振動系に高い適性のある雪の奥の手：ニブルヘイムの逆、振動加速系領域魔法『アルフヘイム』。領域内のあらゆる物質を相に閥わらず均質に熱振動を加速する。

本来ならばムスペルヘイムと名付けたいところだが、雪と響の繋がりを名前にするべく妖精の国：アルフヘイムと名付けた。

深雪が慌ててニブルヘイムで対抗するが、インフェルノを消す涙花をフリーにした時点でそれもまた止められる。涙花の遮断を超えるにはいくつか方法はある。だが、今の深雪には考えつかない。

0—12

均質に温められた氷は融解するエネルギーで熱エネルギーを使う。半分溶けきったところで破壊判定が出て、フルスコアで雪が勝利した。

☆☆☆☆☆

「あ、 霽…2種目優勝おめでとう」

「ありがとう。 茉也早撃ち優勝おめでとう」

「ありがとう」

ホテルのロビーでばつたり会った2人は不自然に会話が途切れ、変な間が空く。

「茉…あの時、身勝手なことしてごめん…」

「…うん」

「…怖かったんだ。 血にまみれて意識を失った茉を見て、もう失いたくない、私の手の届くところにいて欲しい…って。 本当に、ごめんなさい」

霁は腰を深く折つて謝罪する。

「…私も、あの後何となく避けちゃって…ごめん。 どんな顔して会うかとか、分からなくなっちゃって…でもね、 霽、あと事は嫌じやなかつたよ。 私、これでも魔法師としても妖精遣いとしても霁よりは出来ると思うよ? でも、逃げなかつた。 あのね——」

「待つて、その言葉は私に言わせて」

雪は呼吸を整える。

車椅子に座る栞を少し見下ろす様な位置関係だったが、左膝をついて右手で栞の左手をとる。そして、少し見上げて口を開いた。

「御巫栞さん、私と恋人としてお付き合いしてください」

「つ、喜んでッ！」

雪の右手の指に自分の左手の指を絡めて、それを支えに車椅子から雪へと倒れかかる。

そして、2つの影は1つになつた。

「栞…」

「雪…」

「私は…」

「あなたの事が…」

「大好きです！」